
回 想

大原社会問題研究所との43年間

二村 一夫

【聞き手】(発言順)

早川征一郎(法政大学大原社会問題研究所
教授)

谷口 朗子(法政大学大原社会問題研究
所・元所員)

三宅 明正(千葉大学文学部教授)

五十嵐 仁(法政大学大原社会問題研究所
教授)

梅田 俊英(法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員)

吉田 健二(法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員)

【目 次】

研究者になるまで

大原社研とのつながり

大原研究所の資料整理

修士論文のこと

東邦大学のころ

日本社会運動史料のこと

資料の一般公開

社会労働問題研究センター

文献研究・日本労働運動史

海外留学 ヨーロッパ

海外留学 アメリカ

労働運動史研究会のこと

研究所創立60周年

『足尾暴動の史的分析』のこと

『社会・労働運動大年表』のこと

大原社研所長に就任

向坂文庫の受贈

財団解散と多摩移転

労働資料協のこと

「企業別組合の歴史的背景」

最後に

*この回顧談は、1998年11月6日(金)に行われた。その後、テープおこしを行い、二村一夫氏本人を中心に、聞き手も含め、加筆・補正を行なった。なお、「年譜」、「著作目録」は、二村氏自身が作成したものである(編集部)。

【研究者になるまで】

早川 今日、お忙しいところを有難うございます。実は、二村一夫さんが1999年3月末で辞められることになりました。法政大学の専任教員は65歳定年制ですが、70歳までは延長できるので、われわれは延長してほしいと頼んだのですが、ご承知いただけませんでした。そこで今日は、二村さんと大原研究所との長年のかかわりや、ご自身の研究などをめぐってお話を伺って記録に残しておきたいと思い、お集まりいただきました。

まず最初に、研究者になられるまでの過程についてお聞きしたい。東大文学部国史学科に進学されるまでの話、なぜ国史学科を選ばれたのかなど。

二村 わかりました。私が大学に入ったのは1952年、講和条約発効の年、メーデー事件の年です。前年の秋に雑誌の『世界』が講和特集を出して大きな反響を呼びましたが、僕の高校では授業をつぶしてそれを読んでくれた先生がいました。同級生のなかには『朝日グラフ』の原爆特集を英訳して各国に送るといった運動をしたグループもありました。敗戦から6、7年しか経っておらず、占領下だったこともあり、高校生でも社会的関心は高かったのです。

大学に入って、石母田正の『歴史と民族の発見』に感銘したり、高校時代から友人の影響もあって、進学するとき国史学科を選んだのです。僕が見た学部便覧に遠山茂樹先生の名があったのも国史を選んだ理由のひとつでした。ところが、進学してみると近代史の先生は一人もいませんでした。指導教授は日蘭交渉史の岩生成一先生でしたが、講義にはほとんど出席せず、歌ばかり歌っていました。いくらか勉強らしいことをしたのは仲間と開いた読書会くらいです。国史の先輩で後に北大の先生になった永井秀夫さんが東大社研におられ、彼をチューター

に山田盛太郎『日本資本主義分析』などを読みました。

早川 そのころはまだ、大河内一男さんについてはご存知なかったのですか。

二村 いや知ってます、もちろん本を通じてですが。岩波新書の『黎明期日本の労働運動』や隅谷三喜男さんの『日本賃労働史論』などが出たばかりで、どちらもよく読みました。労働運動史で一番勉強になったのは、このお二人の本と平野義太郎さんのものです。この頃の実質的な「先生」は山田、平野、大河内、隅谷の四先生とって良いでしょう。

そんな訳で、国史学科の学生としてはまさに落ちこぼれ でしたが、文学部の良いところは卒業論文を書かせたことです。誰もが卒論を重視し、卒論を目指して勉強する気風が強かった。卒論がなければ、何のために大学へ行ったかわからないままに終わっていたでしょう。実は、この卒論のテーマに選んだのが足尾暴動だったのです。これは、平野義太郎氏が『日本資本主義社会の矛盾』のなかで「これまでの労働運動史ではインテリの指導者だけを問題にしているが、南助松、永岡鶴藏など労働者出身の指導者をもっととり上げるべきだ」と論じており、「じゃあやってみようか」という気になったんです。

調べてみたら、裁判記録類は地方検察庁に保存されているらしいことが分かりました。たまたま、東大音感の1年先輩で後年NHKの大記者になる平山健太郎が宇都宮の出身で、彼が帰郷運動で知り合った社会党の県会議員を紹介してくれました。後には国会議員にもなる稲葉誠一という方ですが、検事出身で宇都宮地検にも顔がきいたのです。その稲葉さんだったか平山さんだったか忘れましたが、どちらかから法学部の団藤重光先生の紹介状を貰ってこいと知恵をつけられました。団藤さんは刑法、刑事訴訟法

の大家で、戦後の刑事訴訟法の制定に大きな影響力をもった方ですから、検察関係者にとっては大先生だったのでしょう。大学の近くにあったお宅に伺い紹介状を書いていただきましたが、広々とした立派な書齋に通され、「これはすごい」と思いましたね。団藤先生の紹介状のおかげで、地検はわざわざ倉庫を調べてくれ、そこで「足尾騒擾事件二関スル機密書類」のファイルが見つかり、しかもそれを借り出すことまで出来たのでした。

史料集めで大いに役立ったのは、明治新聞雑誌文庫です。奇人・宮武外骨が集めた新聞類を保存利用するために、吉野作造らが尽力し、博報堂社主の瀬木博尚が金を出して東大法学部内に設けられたアーカイブですが、赤門のそばの半地下式の小さな数室を本拠にしていました。まだ復刻なんてほとんど出ていない時期ですから、毎日ここに通って、社会主義新聞などをはじめから読んで、関連のある記事を筆写しました。明治文庫は若い研究者には居心地のいい場所でした。文庫の主ともいべき西田長寿さん、それに後の犬丸義一夫人の小山伊基子さんたちが親切に対応してくれました。嬉しかったのは、片山潜がやっていた『社会新聞』に永岡鶴蔵の自伝「坑夫の生涯」が連載されているのを発見したことです。どこの国でも労働者の伝記は少ないというのに、暴動の前に足尾銅山で数年間活動していた人物が自伝を残してしてくれたのでした。

もうひとつ東大経済学部の図書室で、暴動の前年に発行された足尾の友子の規約を発見し、これも大いに役立ちました。卒論そのものは、いまは読み返す気にもならないひどい代物ですが、史料収集という点では、幸運に恵まれてかなりの成果をあげることができたと思います。注や史料を収めた別冊の方が本文より長い2冊の卒論を、何とか期日までにしました。いま

見ると、別冊の方はほとんどかみさんの字です。もっとも、まだ結婚する前ですから正確にいえば婚約者ですが。卒論を書いたことで、それまでの落ちこぼれ学生が、もう少し勉強したいと思うようになりました。

【大原社研とのつながり】

そこで選んだのが法政大学の大学院でした。入試の時に、中村哲先生に「なぜ法政を選んだのか」と聞かれ、「資料の宝庫である大原社会問題研究所があるからです」と答えた覚えがあります。実は卒論の時に、大原が戦前に出した『日本社会主義文献』をみていたのです。司書研究員の内藤昶夫が、森戸辰男の指導でまとめた本ですね。このなかには、明治の社会主義新聞や労働組合期成会の機関紙『労働世界』の主要目次が紹介されていたのです。これを見て大原研究所はすごいと思ったので、塩田庄兵衛さんに紹介してもらい、田沼肇さんを研究所に訪ねました。卒論を書いた直後の1956年の1月か2月だったと思います。田沼さんは「資料はある、だけど全部お蔵にあって使えない」と話してくれ、4月に法政の大学院に政治学専攻の修士課程が新設され、そこで石母田先生が教えられることも教えられ、進学を決めたんです。

早川 塩田先生の名が出たところを見ると、もう労働運動史研究会に入っていたわけですか。

二村 いや、まだ労働運動史研究会は出来ていません。準備会の名で機関誌第1号を出したのがその年の5月で、正式の発足は翌57年です。塩田さんと知り合ったのは、僕のかみさんの母方の叔父・阿部行蔵の紹介です。塩田さんとは都立大学で同僚だったから、労働運動史を勉強したいなぜひ会えと勧められ、卒論のテーマを決める前に塩田さんに会ったのです。彼は当時すでに運動史の大家で、『歴史学研究』に

「さいきんの日本労働運動史文献について」という研究史的論文を書き、大河内批判をしていました。そのとき塩田さんとどんな話をしたかよく覚えていませんが、足尾銅山の採鉱技術者・村上安正さんを紹介してくれました。そこで卒論の準備中に足尾に行きました。村上氏は、ちょうど『足尾銅山労働運動史』を書こうとしていた時だったので喜んでくれ、足尾の坑内をくまなく案内してくれました。とくに徳川時代の坑道跡の印象は強烈でした。体を小さくしてやっと入り、戻るには後ずさりしなければならぬような狭い坑道もあったのです。単身者寮の村上氏の部屋に泊めてもらった時、朝食に久しぶりにばさばさの外米を食べ、足尾はまだ南京米だと驚いたものです。

【大原研究所の資料整理】

早川 大学院に入ると同時に大原の資料整理を始められるわけで、二村さんがよく言う「無給アルバイト時代」ですね。これは大変な仕事だったと思うんですけど。

二村 いや、たいへんな仕事というより楽しみでした。大原研究所にはすごい資料があるとは皆が言っていましたが、実のところその中味は、誰にもあまり良く分かっていませんでした。ご承知のように、新宿区柏木 いまは西新宿ですが、大久保駅のそばにあった研究所は、敗戦数カ月前の空襲でほとんど丸焼けになりましたが、不幸中の幸いで土蔵だけが焼け残っていました。資料や大事な本はこの土蔵にぎっしり積み込まれており、おかげで無事だったのです。この焼け残った本や資料の一部、たとえば農民運動関係は大島清先生がアルバイトを使って整理され始めていましたが、大部分は手つかずでした。だから土蔵に行くといつも何かしら発見があり、考古学の発掘のような喜びが味わえました。なかでも治安警察法や治安維持法関係の

予審調書が出てきた時には興奮しました。開ける箱、開ける箱がみな裁判記録でしたから。また、評議会の『労働新聞』や『無産者新聞』をはじめ、大量の機関紙類を発見した時も、目指すものがやっと出たと感激しました。残念ながら探していた『労働世界』はついに出てきませんでした。この機関紙類はきちんと包装されており、保存状態がきわめて良かったのには感心させられました。たぶん大阪から引っ越した時のまま、土蔵に入れられていたのでしょう。

土蔵へはいつも4、5人で行き、各人が関心のある分野の本や資料の所在確認の作業をしました。たぶん研究員のなかで原資料類に関心を持っていたのは大島さんと田沼さんだけだったでしょう。久留間先生や宇佐美さんは図書、それも洋書中心でした。洋書の整理には、経済学部講師だった良知力さんも参加し、1850年以前に発行された図書の目録を作成されました。土蔵での久留間先生は、いつも職工服のようなつなぎを着ておられたのが目に残っています。また全員が、黒い実着のような上っ張りを着て仕事をしました。すごい埃で汚れたからね。ただ整理といっても、当時は広い場所がないから、資料もあまり多くは持っては来れない。少し運んでは整理し土蔵に戻すといったやり方で、なかなか作業は進みませんでした。大学院5階の研究所には、一番奥に専任研究員の共同研究室兼会議室があり、原資料類は主にそこで整理しました。会議用のテーブルを使ってね。共同研究室をアルバイトが占拠し、大きな顔して資料整理をやったんです。研究員の皆さんはさぞ迷惑だったに相違ないと、今になれば思うんですけど。

原資料の整理がいくらか進んだのは、1960年に「わが国労働運動における社会民主主義の研究」というテーマで科研費をとってからです。大島さん、田沼さんの他に、所外から社会学部

の村山重忠先生や増島宏さん、それに僕もメンバーに加わりました。この時に、資料用の棚を共同研究室に入れ、資料整理がいくらか本格的になりはじめたのです。とくに無産政党関係は、アルバイトとして参加された高橋彦博さんや大野節子さんらの努力でかなり進みました。法政大学出版局から出た増島・高橋・大野共著の『無産政党の研究』は、この研究プロジェクトの成果です。

早川 そうすると、この資料整理の仕事は、久留間所長を初めとする研究所の一つの方針としてやったんですか。研究員から職員、それにアルバイトも参加して。

二村 もちろん所蔵図書資料を利用可能な状態にすることは、研究所の一般的な方針でした。ただ、専任研究員が原資料整理の実務を担当することはほとんどなかったし、60年代にはまだ職員も参加していませんでした。資料整理の実質的な担い手は、ほとんど大学院生のアルバイトです。職員には戦前資料を触らせもしなかった。たぶん研究者かその卵でなきゃ資料整理は出来ないという考え方だったんでしょう。谷口さんは後には 資料の主 になりますが、それは70年代以降のことです。

早川 じゃあ、職員の人は何をやってたんですか？

谷口 年鑑編集のための資料の収集や整理をしてました。戦前資料の整理については、研究員がやるものだから資料係は手をつけるなどといった雰囲気でしたからね。農民運動の資料整理は大島さんの指揮下に、岡田和喜さんや五味健吉さん、石垣今朝吉さんといった大学院生のアルバイトがやっていました。

二村 ただ「資料整理」とはいつても、まだどのように進めるべきか模索中というのが実情で、ピラ1枚についてカードを1枚つくるといったやり方をしていた時もありました。だけど、

膨大な資料を、そんなやり方ではどうい整理にはならない。カードに対応する原資料がどこにあるかが分からないのですから。資料を書架に並べ、決まった場所に置かないと、見つけれないわけです。だから1950年代までは、整理というよりどんな資料があるのか確認しただけというのが実際のところでした。図書や裁判記録のようなまとまった形のもの、あることが分かればある程度利用可能でしたが。

三宅 この時に何か参考にされたものがあるんですか。例えば明治新聞雑誌文庫をモデルにして、それに近い形にするとか、あるいは史料編纂所か何かのやり方とか。それとも参照されるものは全くなしに進められたのですか？

二村 モデルはなかった、というよりまだそれ以前の状態だったのです。整理途中の資料は、西日が当たる書庫の窓際に木箱を横積みに入れて、ばらばらになりそうなファイルの表紙を付け替えるなど、多少の手入れをして土蔵に戻していました。

谷口 後に良知力夫人になる池邦江さんが大学院生で、原資料を靴みがきのブラシでこすって、虫の糞をはらっていましたね。

二村 資料の一部は、虫に喰われて痛んだものがあつたから、それをさらに痛まないようにするといった程度の作業はしました。だけどそれも、今とはちがいで、埃を払って紙の劣化を防ぐという程度のものでした。

「社会民主主義の研究」で書架を入れてからは、機関紙誌と整理済みの資料の一部をそこに置くようになったので、いくらか使えるようになりましたが。また、資料のごく一部についてはタイプ印刷で復刻しました。《労働運動史資料》とか《農民運動史資料》がそれで、年1冊から2冊のペースで出しました。《労働運動史資料》1の『関東合同争議資料』は田沼さんの編集ですが、2以降、つまり『日本労働組合評

議会資料』は、大部分は僕の編集解説です。ただし後の時期のものは高橋彦博さんや、現クロアチア大使の大羽圭介さんとの共同作業ですけれど。

五十嵐 じゃあ、どのような資料があるかはわかるけど、一般の閲覧者が利用できるような形ではなかった？

谷口 とてもそこまで行きませんでした、ただ戦前の機関紙誌は製本しましたね。

二村 そうだった。僕は兼任研究員になるまでは無給だったけれど、いつだったか夏休みをほとんどつぶして新聞雑誌の整理をしたことがあった。その時はさすがに可哀想だということだったので、いくらか貰ったな。たしか兼任研究員になる前年だったと思うけど。劣化した輪ゴムや錆びたクリップをはずしたり、題号や発行期間など背文字の原稿をつける準備作業をしました。

兼任研究員として最初に『資料室報』に書いたのは「大原社会問題研究所所蔵の戦前資料について」という紹介論文ですが、これを見ていただければ、ボランティア時代の資料整理という資料調査の具体的な内容がいくらかお分かりいただけると思います。

【修士論文のこと】

二村 法政の大学院に来て、ようやく勉強らしい勉強をはじめました。石母田ゼミでは、エンゲルスの『反デュリング論』や、ウエーバーの『権力と支配』などを読みました。2年目から石母田ゼミはそのままでしたが、先生は籍を政治学専攻から私法専攻に移され、遠山茂樹先生がゼミを担当して下さった。ことによると、石母田さんが僕のために遠山さんをお呼び下さったのかもしれない。国史に進学したときに遠山先生とすれ違った話をしましたから。遠山先生は明らかに僕向きテキストを選んで

下さった。片山・西川『日本の労働運動』といった史料類を読んだのです。

大学院では、2年かけて『法学志林』に発表した論文「足尾暴動の基礎過程」をまとめました。ゼミのレポートなどは、できるだけこのテーマに引きつけて書きました。学部の卒論で暴動の事実経過はある程度わかっていたから、問題はその意味を明らかにすることでした。石母田先生は、「史料に寄りかかった仕事してはたらず行き詰まる。何を解くべき課題とするかをよく考えろ」と強調されていました。「問題こそが重要で、問題のうちに答の半ば以上は含まれている」とか「若い間は、生涯をかけて解くべき課題を発見することが重要だ」と言われてね。これは方々で受け売りをしましたから、聞かれた方がいるかもしれませんが。ですから、足尾暴動をどのように分析するかを考え続け、それが次第に大河内一男さんの「出稼ぎ型論」批判に収斂していったのです。ご承知のように「足尾暴動の基礎過程」の基本的なテーマは、鉱業技術の進歩は飯場制度を弱体化させずにはおかなかったということで、「暴動は飯場頭の強度な支配によっておきた」という出稼型による大河内さんの解釈を批判したのです。

実は、これを着想する上でヒントになったのは、久保栄の「のぼり窯」です。「のぼり窯」には足尾暴動も描かれており、『日刊平民新聞』なども調べて書かれたものです。ただし、ヒントはそこから得たわけじゃない。「のぼり窯」の中心的な舞台は北海道の煉瓦工場です。煉瓦の成型が、熟練労働者の手作りから、機械による成型に移る過程を描いているんです。腕のよい手づくり煉瓦の職人だった男が戦傷で手作り作業が出来なくなり、機械を操作する労働者になる。この成型機械の導入が職人たちの人間関係に影響を及ぼす過程が描かれている。まさに

技術の変化が生産関係を変化させるというテーマです。これがヒントで、修士論文をまとめました。もっとも修士論文のタイトルは「出稼型論批判試論」でした。『法学志林』の論文ではこちらをサブタイトルに回し、文章はいくらか直しましたが、基本的な内容は修士論文と変わりません。

この論文は、多くの方にわりあい高く評価してもらえました。とくに嬉しかったのは、修士論文を提出したすぐ後に石母田先生に呼ばれ「助手試験があるから受けてみる」と言われたことです。「先の保証はないけど、奨学金のつもりで受けて見なさい」といわれた。実は、それまで僕は研究者になろうと思っていたわけではなかった。役人やサラリーマンなど宮仕えはしたくないと、やりたくないことだけははっきりしていたんだけど。大学院を出たら何になると考えていたわけでもない。ただ、もう少し勉強したいと思っていただけだった。だから、尊敬する先生から研究者になれと勧められたことは何とも嬉しかった。生涯であれだけ嬉しかったことはないと言ってもいいくらいです。

梅田 「足尾暴動の基礎過程」についての僕自身の感想も含めて一言言わせていただきたいんですが。僕がこれを初めて読んだのは、単行本ではなく『法学志林』から直接コピーして読んだんです。それで、非常に鮮明な感動を覚えました。どこに一番感動したかというのと、大河内先生はああいう暴動は原生的労働関係の中で遅れた歴史の中で起こったんだというのに対し、そうではなくて歴史の進歩の中で起こっているんだということを明らかにされ、目が覚める思いをしましたね。ところで、当時、大河内先生やその周辺の人たちの反応はどうだったんですか。

二村 まあ、全体的には、割合高く評価してもらえたんじゃないかと思います。大河内先生

は「ずいぶん僕が引き合いに出されておるな」、「一度乾杯しよう」と言われました。少し後のことになるけれど、僕が東邦大学でくさっていた時に、さる大学に推薦してくださった。この話は申し訳ないことに僕の方からお断りしてしまったのだけれど、大河内先生が僕をある程度は評価してくださったように感じました。正直のところ反論していただきたかったのですが、先生は誰の批判に対してもあまり弁解や反論をなさらない方でした。

周辺の研究者では、活字になったものでは氏原正治郎先生がいちばん早く認めてくださった。59年の暮に出た『講座 社会保障』の論文で「最近の労働運動史の諸研究が重要な論点を指摘している」と評価してくださった。論文を発表したのが7月のことですから、出てすぐに書かれたものでしょう。そのほか、矢島悦太郎先生も論文のなかでたびたび引用してくださった。矢島先生の方は「基礎過程」ではなく、修士論文をまとめる前の58年の7月に労働運動史研究会で発表した口頭報告論文の方ですが。また、隅谷三喜男先生は1960年に『思想』に「納屋制度の成立と崩壊」を発表されましたが、この論文の筋は「基礎過程」と共通するもので、いくらかは私の論文の影響があるように感じました。若い研究者に知られるようになったのは、たぶん中西洋氏が「日本における 社会政策 = 労働問題 研究の現地点」という大論文でとりあげてくれてからだろうと思うけど。

早川 社会政策学会でも発表したんじゃないんですか？

二村 1960年秋、たしか10月31日です。前の晩、岐阜の友人の家にいたとき長女が生まれたと電報が来たから。立命館大学で「労働運動史」を共通論題にした大会です。この大会はある意味で、労働運動史研究の転換を象徴する大会でした。これについては、大会直後に栗田さ

んが『季刊労働法』に書いていますし、私も「文献研究」でふれましたが、私以外の報告者、渡部徹、岸本英太郎、白井泰四郎の皆さんが、一致して大河内さんと同じように「労働組合は労働力の売り手の組織である。そうした本質に即して労働運動史も評価さるべきだ」と主張されたのでした。それまでの労働運動史は、谷口善太郎『日本労働組合評議会史』や渡部徹『日本労働組合史』などが典型ですが、運動家の立場で書かれた、それ自体が運動の一環であるような歴史が中心でした。この頃から、それまでの労働運動史研究の方法、というより研究態度に対する批判がいっせいに出てきました。簡単に言ってしまうと「左翼善玉史観」批判です。もともと僕は、それまでの実践家による運動史、より具体的にいえば、あるべきであった方針によって過去を断罪したり、顕彰したりする運動史に強い違和感を感じていましたから、「左翼善玉史観」批判そのものについては賛成でした。自分には実践家としての資質が欠けているという自覚があったこともあり、また研究者の政治的あるいは思想的な立場によって初めから結論が決まっているような運動史に疑問をもっていましたから。ただ僕は、大河内さんたちのように、日本の労働組合を「労働力の売り手の組織」という定義で裁断することには疑念を抱いていました。この疑問が次の研究テーマに繋がってくるのですが、それはもう少し後のことです。

三宅 以前、明治大学の栗田健さんが、出たときはこんなに影響力をもつとは思わなかったということをおっしゃっていましたが、実際に広く受け入れられたのは、もう少し後のことで、ある程度時間がかかったんじゃないでしょうか。とくに外国研究をやった人たちが、重要だと評価するようになるのは、もうちょっと後になる。

それから、技術の変化が生産関係を変えてい

くという「基礎過程」のテーマのヒントが久保栄だということは、はじめて知ったんですけれど。「足尾暴動の基礎過程」が出た直後に、兵藤釗さんの最初の論文や池田信さんが生産過程の変化を重視された論文を發表されています。今から考えると、「イノベーション」という言葉が「技術革新」と訳されて日本社会に定着していく、そういう時代の中で生まれたのではないのでしょうか。それまでのように政治的な現象として労働運動や労働争議が扱われていたのに対して、もっと働いている場所の変化を見ない限り日本の特徴はつかめないんじゃないかと考え始めた。そういう傾向のいわば先鞭だったのでないのでしょうか。そうした点についてどうお考えでしょうか。この2点を伺いたいんですけど。

二村 そのころ技術革新をめぐる研究がいくつか出はじめていたから、そういう議論からも影響は受けてるかもしれない。大河内さん自身も出稼型論を修正された時期に当たってます。たぶん、高度成長の現実が出稼型論の限界を明らかにしつつあった時期だったと言えるでしょう。ただ、兵藤さんや池田さんの論文が活字になるのはもう少し後ですから、兵藤さんや池田さんの影響を受けたわけではない。

梅田 もう一つ、総体的な感想と質問をつけ加えさせてください。僕の勝手な思い込みかもわかりませんが、先生はどうお考えになるか伺いたい。さっきちょっと話が出た、労働現場の変化にともない社会関係が変化するという視角は、石母田先生の『中世的世界の形成』から影響を受けたんじゃないかなと思ってますよ。黒田庄という一つの荘園の中での変化を、古代から中世まで追っかけることによって社会の関係を知らうという、大きな枠組みのところはやっぱり影響を受けたのではないのでしょうか？

二村 小さな対象の中からでも普遍的な問題をつかみ出すことが可能だという確信は、明らかに石母田さんに負っています。足尾銅山という一つの限られた舞台で、日本社会全体に共通する歴史の流れを追究するという方法は影響を受けてる。ただ『中世的世界の形成』から影響を受けたと言うわけではない。正直のところ、あの本は、当時の僕が読みこなすにはちょっと難しすぎる本でした。むしろゼミや雑談などいろいろな機会に、先生の意見を聞き、そこから影響を受けたのだと思います。その他にも、いろいろ影響を受けていることは少なくない。たとえば、彼は講座派にはかなり批判的だった。とくに『日本資本主義分析』に対しては、ああいう図式主義ではだめだという言い方をされていた。そのことは、僕のその後の研究の方向に小さからぬ影響を及ぼしている。

また遠山先生の教えからも影響を受けた点がある。これも僕は何度も受け売りをしたことがあるんだけど。それは、「実証とは、自分の仮説に合うものを集めることではない。むしろ合わないものを集めそれを自分の仮説に突きつけ、それでもなおかつ仮説がくつがえされることが必要だ」と言われた。僕の書くものが軽妙とはほど遠いものになっているのは、この教えを意識しすぎてきたためかもしれない。

早川 隅谷さんもさっきおっしゃった『日本賃労働史論』を出されるし、東大社研の調査でも職場の変化の問題に注目しはじめて、佐久間ダムの調査なんかをやってますからね、かなり変わり目の時期の、そういう意味で後に残る意味をもった。

【東邦大学のころ】

早川 次に、2つほどお伺いしたい点があります。一つは60年4月に、東邦大学の専任講師

を経て助教授になりますね。この間の二村さんと大原研究所とのかかわりについて伺いたい。もう一つは、東邦大学という医学系の大学に就職されたいきさつについてです。

二村 まず東邦に行った話ですが、これは東邦大学が教養課程を独立させることになったんですが、その中心が医学部の森於菟先生でした。森先生は中村哲さんと台北帝大の同僚で、中村哲先生に社会科学担当の適任者の推薦を求められた。中村さんが3人いた助手の名をあげたところ、森さんがその中から僕を選んだということらしいんです。だから任期途中の2年で助手を終えた。もともと政治学科の助手は先を保証しないと最初に言い渡されていたから、遅かれ早かれ出ざるをえなかった。東邦では政治学を教えるはずだったんだけど、実際に行ってみたら法学をやれというんですね。要するに東邦大学は医学部だけでなく、薬学部、理学部がある。理学部の卒業生の多くは先生になるので、教職課程をおこななければならないが、それには憲法が必修だ、だから法学を担当しろという。学科新設の際の資格審査では政治学担当教員としてパスしたのに、法学をやらされた。学生には迷惑な話だが僕には勉強になった。

大原研究所との関係は、東邦大学に就職しても、それまでとあまり変わりませんでした。いくらか違ったことといえば、科研費のプロジェクトなどで、僕はアルバイトじゃなくて正規の研究分担者になったくらいでしょう。

ただこの時期は、研究面では行き詰まりを強く感じていました。自分で言うのもなんですが、修士論文がかなりの完成度だったので、それを乗り越える研究をどのように進めたら良いかはっきりしなかった。学部の卒論をもとに修士論文を仕上げたときは、それなりに先が良く見えて、楽しくまとめることが出来たのですが、それを次にどのように発展させていったら良いか

分からなかった。とくにこの頃は子育てに追われ、なかなか勉強が出来なかった。60年と63年に子供が生まれた上に、かみさんがフルタイムで働き始めたものですから。こうした状況を、自然科学系の大学で専門外のことを教えさせられているからダメだと感じ、焦っていました。そうした中で仕事らしい仕事は『評議会資料』だけです。著作目録を見てもらうと分かりますが、この頃はろくな論文が書けなかった。だから、大原研究所の研究員になったときは、本当に嬉しかった。

【日本社会運動史料のこと】

二村 今度のはじめて自分の年譜を書いてみて気がついたんだけど、僕と大原研究所とのかわりはほぼ10年ごとに変化しています。1956年に大学院に入って資料整理をはじめ、66年に兼任研究員になり、76年に留学し、85年に所長になった。きっかり10年というわけではないけれど、ほぼ10年きざみで大きく変わっています。

僕が専任研究員になった前後は、研究所も大きく変わった時でした。田沼肇さんや原薫さんが学部に移られ、代わりに中林賢二郎さんと僕が入った。一番大きかったのは、戦後の研究所を担ってこられた久留間先生が退職されたこと、そして宇佐美・大島・舟橋の3先生が2年交代で所長をやる仕組みが出来たことでしょう。

創立50周年をひかえ、いろいろ新しい計画もその頃生まれました。創立50周年は1969年ですが、準備は67年ころから始まっている。所蔵図書目録の作成とか、50年史の発行とかいろいろありますが、僕が主にやったのは、法政大学出版局から出した《復刻シリーズ日本社会運動史料》の編集です。それまでの復刻は、タイプ印刷で1年に1.2冊ぐらいずつ労働運動史料集、

農民運動史料集を出すやり方で、収録できる分量はごく僅かです。それに、タイプ印刷だと、きちんと校正できないから、資料集としての信頼度にも問題がありました。これを《日本社会運動史料》で大きく変えたのです。

三宅 復刻はほかにも例があったんですか。

二村 明治文献資料刊行会が、労働運動史研究会の編集で、《明治社会主義史料集》を出しています。実は《日本社会運動史料》の企画も、最初は明治文献で出す話があったのです。《大正社会運動史料集》として労働運動史研究会と大原研究所の共編でね。僕は研究所の代表と同時に労働運動史研究会の委員としての二重の資格でその準備会に出ていました。その時に、明治文献資料刊行会の営利主義的な態度に接し、パートナーとしては信頼できないという印象を強くもちました。結局、68年2月に、研究所側から明治文献に交渉打ち切りを通告し、独自の編集で法政大学出版局から出すことにしたので。その後間もなく明治文献は潰れてしまい、あの時いっしょにやらなくて良かったと思いました。

しかし、新しい事業をやるといっても大原社研には資金がない。財団法人だったこともあり、大学からの補助金の増額は難しかった。それでも機関紙誌編は、商業ベースでも何とかなりそうだったけど、原資料編は見通しがたたなかった。そこで復刻の印税の前払いで編集費を出そうとした。原資料編の編集作業を担当していた大野節子さんへの謝礼は、はじめは研究所からでなく法政大学出版局から出す形をとった。1年に1冊出せば何とかつじつまが合う計算だった。しかし、とてもそのテンポでは無理と分かり、途中で切り替えました。

私の仕事のかなりの部分はこの復刻の準備作業でした。儲け主義的な復刻でなく学術的な復刻にしたいと考えたので、欠号のない完全な原

本を揃え、ペンネームを調べ、索引や解説もしっかりしたものをつけるという方針を出してやり始めました。索引や解説には所外の多くの方の協力を仰ぎました。松尾洋・多賀夫妻、渡辺悦次さんなど多くの方にお力添えいただきました。私もこのころは割合せつせと働きましたよ。原本探しやペンネームおしのために5年間で100人をこえる人と会いました。おかげで新人会機関誌のときは宮崎龍介、平貞蔵、新明正道など十数人、『マルクス主義』では久津見房子、山川菊栄、野坂参三、福本和夫、志賀義雄など二十数人といったように、数多くの方にお目にかかることが出来ました。もうほとんどの方が亡くなられてしまいました。福本和夫氏の話し方が昭和天皇に似ていたことなど面白い話や忘れがたい思い出もありますが、これは話し出すときりがありません。

梅田 《日本社会運動史料》はどのくらい売れたのですか。

二村 ものによって違います。機関紙誌編は普通は300部、多いもので500部くらいでした。原資料編は作ったのは500部ですが、こちらはなかなか売れなかった。シリーズ全体でいちばん売れたのは『無産者新聞』で700から1,000部、ついで『新人会機関誌』が500から600部くらいだったと思います。

梅田 このころはまだ毎月1冊程度のペースでしたね。

二村 はじめは月1冊弱です。セットにするとうすぐ高くなるから、月々出そうということ。

早川 よく出せましたね、毎月。

二村 僕も若かったし、法政大学出版局の担当編集者の平川俊彦さんはさらに若かった。それに、出版局もいくらかは商売になったんですよ、ずいぶん力を入れてくれた。

梅田 聞いた話ですが、固定客がついていて、

刷り上がったら自動的に送りつけば買ってくれた時代だったそうです。法政大学出版局のドル箱じゃなかったですかね、当時は。

二村 いやいや、とてもドル箱にはならなかったでしょう。ただ、普通の本の5倍から10倍といった高い値段の割には一定数の固い読者があったから、売上高は大きく、損はしなかったというところかな。刷り部数が少ないから売れ残りも少なく、売れ残ってもいつかは必ず売れるというものでした。月々出したので、個人でも買ってくださる方が何人がいらして、そのおかげで続いたんです。

専任研究員になってすぐの、もう一つの大きな仕事は50周年記念の展示会です。《社会運動の半世紀展 圧制と民衆の抵抗》という題で、1969年の5月に東急日本橋店でやりました。大島所長の努力で朝日新聞社が共催してくれ、おかげで経費はデパートの宣伝部もちでしたから、予算を気にせずに展示品を選んだり、大きな写真もたくさん使うことができた。会期中は所員総出で大忙しでしたが、連日2,000~3,000人の入場者があり、解説カタログも好評で3,000部が売り切れ、急遽増刷したほどでした。久留間先生がたいへん喜ばれて、開会式でテーブルカットをされた後、わざわざ僕のところに見えて丁寧に「ご苦労様でした。どうも有難う」と礼を言われて、ちょっとびっくりしました。

ただ、展示会の準備が大学院のバリストと重なり、これは大変でした。機動隊が入ってバリストが一時解除になったんですが、またいつ同じことが起こるか分からないということで、資料類を全部麻布に移すことになった。労働旬報社から車出してもらったり、僕も家の車をもってきて、麻布校舎へ運び出したんですよ。最後は、資料を入れる箱がなくなっちゃってね、その辺の机の引き出しをはじから引き抜いて、その中に資料を放り込んで運びました。そのこ

る大原で車を運転できたのは僕だけだったから、なにかと言うと運転手も兼ねた。もっとも、そんな時期だったから「圧制と民衆の抵抗」なんて銘打った展示会を都心のデパートで開くことが出来て、人も集まったのでしょうがね。

【資料の一般公開】

二村 復刻と展示会のほかに、研究所での仕事としては、もうひとつ資料の公開準備がありました。1967年に大原研究所は麻布にあった空き校舎の一部を借りて分室を設置しました。これは旧協会の建物で、戦後は中央労働学園大学が使っていたのですが、これが法政大学と合併して社会学部となったのです。一時は社会学部と工学部が、さらに第一工業高校が使っていたのですが、工学部は小金井に移り、工業高校も廃校になり校舎が全部空いたのです。分室が出来たおかげで、土蔵に死蔵されていた資料をようやく書架に並べることが出来るようになった。おかげで1971年から図書資料の一般公開が可能になったんです。最初は週2日、73年からは土日を除く週5日の公開です。僕も毎週1回は麻布に行き、資料整理にもかかわっていました。その後だんだんと整理の実務からは離れましたが。実は、僕が入ってすぐ、資料整理についての方針を変えたのです。それまでは、戦前の資料は研究員と大学院生にしかさわらせなかった。それではとても資料の公開は出来ないのです、職員の人たちが中心になって資料整理をするように変えたのです。71年から谷口さんが麻布分室担当で、しだいに資料の生き字引になっていったのです。

三宅 大原の英文名はOhara Institute for Social Research、つまり社会調査研究所ですが、それにライブラリーやアーカイブスという機能も併せて考えていかなきゃならないという議論はあったんですか。それと、ちょうど明治100

年記念の頃で、学会会議が国立公文書館をつくれと言ったでしょう。そういうのも関係があったのですか？

二村 それは全然関係ありません。これは研究所が主体的に計画したものです。もともと戦前の大原研究所は専門図書館としての機能を果たし、多くの大学よりずっと充実した内容をもっていたのです。

吉田 研究所が戦後大きく発展するにはいろいろな条件があったと思います。なかでもいま先生が話された、《日本社会運動史料》の復刻と《社会運動の半世紀展》の開催、それから図書資料の公開は重要だったと思います。僕もこの資料公開の恩恵を受けて占領期の研究が進んだ経過がありました。ところで、研究所では、公開によって生じる問題点などをあらかじめ討議されたわけですか。また、公開を提案されたのは二村先生なんですか。

二村 もちろん、前々から公開については議論されてきました。計画だけなら、法政大学との合併前の駿河台時代に、上杉捨彦先生が「情報センター構想」をたてておられた。実は、僕が兼任研究員になる前年の65年にも、研究所は労働問題文献センター計画をたてています。この頃、文部省が、全国各地の大学に大型コンピュータを装備した文献センターをつくる計画を作ったそうですが、そこには大原社会問題研究所の名もあつたらしい。もっとも結局は、私学の場合は法的な制約があるということで頓挫したのですが。だから、資料の公開方針そのものは早くからあった。公開を目指していたからこそ『所蔵文献目録』の作成作業を進めていたわけです。

ただ、どうすればこれを具体化出来るかはあまりはっきりしていなかった。麻布校舎を確保すれば公開できると提案したのは、あるいは僕だったかもしれません。いずれにしても、僕が

研究員になった直後の67年に、大学側に麻布校舎の使用を認めてもらい、ここに分室を設けましたが、これは研究所の将来にとって計り知れない大きな意味をもった。スペースが広がったので、多くのコレクションの受け入れが可能になった。松川事件の資料も、東大社研との競争になりましたが、大原が利用者の資格を問わず公開していたから、寄贈を受けることが出来たのです。これが縁で、メーデー事件やレッドパージの資料なども受け入れることが出来、そうした図書資料を持っていたから、移転の度に書庫スペースを拡大することが出来たのです。

もうひとつお話ししておきたいのは、研究所が「利用者の資格を問わない」専門図書館・文書館となったことです。現在研究所は、この完全な公開制度をとっていることで各方面から高い評価を得ていますが、この方針はすんなり決まったわけではありません。実は研究員は、僕も含め公開を研究者に限る方向に傾いていました。というのも、閲覧者のなかにはビックリするほど非常識な人もいて、貴重な機関紙の原本に自分が調べている地域の記事にはじから万年筆でマークをつけた人さえいたのです。だから貴重な資料を保存するには、ある程度の制限はやむをえないと主張したんです。しかし、ライブラリアン・是枝洋は、無条件での一般公開を主張し、結局われわれが説得され、利用者の資格をまったく問わない一般公開ということになったのです。そうした点では是枝さんにはずいぶん教育されました。

谷口 一般公開前にも、研究者の方は閲覧に来てましたよね。

二村 ええ、日本女子大学の喜安朗さんが私学研修福祉会の内地留学でこられ、エルツバッハ文庫を使っておられます。また、僕の高校時代の恩師だった都立大学の森山重雄先生も、プロレタリア文学やアナキズム関係の資料を見

にこられました。その他にも立命館大学の細迫朝夫さんが客員研究員として滞在されました。

しかし、麻布分室が出来たことで研究所は大きく変わる条件をえました。やっと大原社研のライブラリー機能を復活させることが出来たのです。もうひとつ69年に『所蔵文献目録(戦前の部)』を出したことも忘れてはならないと思います。これを完成させるについては、僕らも冬のさなかに暖房のない柏木の土蔵に通って、カードを作ったりしました。

【社会労働問題研究センター】

二村 もうひとつお話ししておきたいのは、社会労働問題研究センターのことで。敗戦後インフレで立ち行かなくなっていた大原研究所は、1949年に法政大学と合併しいったん財団法人を解散して、法政大学の付置研究所になったのです。しかし、その翌年にはすぐに「財団法人法政大学大原社会問題研究所」として、ふたたび財団法人になりました。旧所員だった森戸辰男さんが文部大臣をやったことでもあり、財団法人の方がいろんな助成金を取りやすかったんでしょうね。私学助成はまだなく、財団法人なら文部省などから助成を得やすいという判断があったようです。ところが、私学に対する経常費助成が始まりその比重がふえると、学校法人法政大学の教職員には補助金が来るのに、財団法人法政大学大原社会問題研究所の研究員や職員にはそれが出来ないわけです。これは大学にとっては大変なマイナスですよ。だから、「大原社研を付置研究所にせよ」という議論が出てきたのも当然です。この時には、われわれも、研究所改革問題をいろいろ検討しました。最終的には、財団法人を維持したまま、大学付置の「社会労働問題研究センター」をつくり、われわれは全員そこに所属し、大原社会問題研究所の所員も兼ねるという方策をとったわけで

す。この方針を決める時に、僕は全国の主要私大の付置研究所を見て回りました。理事会や学部との関係、運営の実態・問題点などを調査したのです。簡単なメモだけで報告書は書きませんでした。財団法人を解散して付置研究所にするのはマイナスが大きいという結論を出しました。私立大学の付置研究所の場合は、専任研究員がごく少数かぜんぜんいないから、その運営は各学部から選出された代表によって進めざるをえない。その場合どうしても学部間バランスを考慮した決定になる。たとえば、ある年にひとつの研究プロジェクトが経済学部中心で進められると、次の年は文学部、その後は法学部といった形をとりがちで、そうなると研究所としての独自の個性は出しえない。また蔵書構成も一貫しないものとなる。つまり、全学部から同数の運営委員が出て「民主的」な運営をすればするほど没個人的になり、単なる研究費のばらまき機関になるおそれがある。同時に、付置研究所になると職員人事は全学的な配慮が優先され、異動が頻繁におこなわれ、専門職的な職員を育てることは難しい。以上が、他大学の研究所を見ての主な結論でした。財団法人方式は閉鎖的であることなど問題もあるけれど、研究所の個性を発揮する上では意味がある。よって、法人は解散せず、経常費助成を受けられるような組織をつくり、所員はそこに籍を移す。もっとも、単なるトンネル機関をつくるだけでは具合が悪いということで、法政大学図書館の協調会文庫と大原社研の蔵書を統一的に利用する機関を設けることを大義名分にしました。実際、利用者の側から見れば、共通した分野の蔵書でありながら、協調会は官庁や財界から集めたものが多く、大原は運動と結びついて集めたものが多いから、これを1カ所で見られるのはメリットがありました。その点で研究センターは、かなり実質的な意味もあったのです。

ここでもうひとつと付け加えておきたいのは、旧協調会資料の入手のことで。「協調会文庫」は協調会の付属図書館の旧蔵書ですが、この他にも協調会が業務として作成したり受け入れていた資料があるのです。その中には、各県の警察部が労働組合大会に速記者を入れて作った速記録などかけがえのない資料も大量に含まれています。この旧協調会資料は、法政大学との合併の後も中央労働学園に残されていたのです。この資料の存在は一部の人には知られており、希望者には見せてもいたのですが、閲覧室がなかったこともあって、大事な資料を切り抜いて持ち帰る人さえいたのです。保管状況も良いとはいえず、もしも火災などがおきたらと心配でした。そこでこの貴重な文書を研究所で購入することは出来ないかと、中央労働学園と法政大学に頼み、75年3月これを入手することが出来たのです。たまたま鈴木徹三先生が財務理事だったのと、年度末で予算執行に余裕のあった時だったことも幸いしてトントン拍子で決まったのでした。

吉田 社会労働問題研究センターの設置にもなって、身分も変わったわけですね。

二村 変わりました。財団法人時代は専任研究員というだけでしたが、法政大学の付置研究所になったことで教授になった。

早川 二村さんが教授で、私が助教授になったんです。

【文献研究・日本労働運動史】

早川 研究に関してちょっと伺います。70年に「全国坑夫組合の組織と活動」を発表されますが、この辺から研究の道筋が見えてきたんじゃないかという気がするんですが、いかがですか。

二村 いや、まだ見えていない。全国坑夫組合をやりかけたのは、足尾暴動以降の鉱山労働

運動を取り上げることで、それまでの研究を発展させられるかもしれないと思ってやり始めたんです。だけど、これで研究の展望が拓けたという感じはもてなかった。

三宅 71年に例の『文献研究・日本の労働問題』（総合労働研究所）の増補版に労働運動史についての研究史を書かれましたね。また75年の『岩波講座 日本歴史』に論文をかかれましてね。どちらも恐らく依頼された原稿だとは思いますが、それを引き受けられた理由と一番主張されたかった点を伺いたいですけれども。

二村 一番のポイントは、大河内さんのように「労働組合は労働力の売り手の組織である。それ以上でも、それ以下でもない」と理解したのでは、日本の労働組合、とくに戦前の労働組合は理解できない、これが、一つの主張点でした。また大河内さんは、争議や暴動は非日常的な事件にすぎない。労働運動史研究は、組合の規約とか団体協約など、もっと日常的な活動を研究しなければならないと主張されていました。僕は、実際に日本の労働組合の規約や団体協約を見ていたこともあり、大河内さんの提唱に疑問をもちました。単に規約や団体協約の文言を分析してみても、その実態を明らかにできるとは思えなかった。争議は事件にすぎないと言うが、戦前の日本ではストライキ抜きには労働条件の維持改善はありえなかった。だから労働運動史研究、労働組合研究にとっても争議研究は重要だと主張した。これが第2点ですね。

だから、この文献研究の論文は、一般には争議研究の提唱というふうには受け止められ、またそれはそれで間違いじゃないけど、僕は争議などに示される労働者の行動を通じて、日本の労働者の団結の特質を明らかにしようと主張していたのです。この論文は、たぶん僕が書いたものの中でも、わりあい影響力をもち、多くの若

い研究者が争議研究を取り上げた。おそらく、方法として、また資料面でもとつき易かったこともあるのでしょう。ひとつの争議を研究すれば何か意味のあることを解明出来そうだとということで。もうひとつの岩波講座の論文の方は、そうしたことを考えはじめてはいたけれど、全体としては中途半端でしたね。

三宅 71年の「文献研究・日本労働運動史」で主として論敵にされたのは、大河内さん、渡部徹氏、あるいは白井泰四郎さんなんかですけども、あの時点で、戦前の日本の労働組合は労働力の集団的な売り手であるという議論がベースになって研究が進んでいたというふうにお考えですか。

二村 いや、そうじゃないと思う。どなたも、抽象的に論じられていた。そうした方法での実証的な研究成果はほとんどなかったし、いまだにないでしょう。

三宅 岩波講座の論文は考えようによっては、労働組合を労働力の集団的売り手として考えた場合に、どういう議論ができるかという話をしてるとも読めるでしょう、あれは。

二村 そうかな。僕は余りそういうふうには考えないけど。僕は、鉄工組合や友愛会に結集した日本の労働者は、なぜあれほど「社会的地位向上」に敏感だったのか、これを解けば日本の労働者の団結の特質を明らかにすることが出来るんじゃないかと考えた。友愛会も鉄工組合も「労働力の売り手の組織」として評価するとなれば、どちらもほとんど無意味な存在だった、と言わざるをえないと指摘したのです。

要するに、大河内さんたちは、ウェブの労働組合の定義で日本の労働運動史を評価し直そうという提唱だったと思うんですね。だけど僕は、実際に『評議会資料』の編集や全国坑夫組合の研究で、労働組合の資料を日常的に見ていたから、そんな基準では日本の労働組合は理

解できないと考えるようになっていた。

もうひとつ、僕は、争議研究を提唱したとき、争議そのものだけでなく、争議のような非日常的な事態のなかだからこそ残る文書や行動の記録を通じて、彼らの「日常」を把握する手がかりを得ることが出来ると主張したんです。だから、山本潔さんの争議史研究の方法は、僕の提唱とはかなり異質です。この研究史論文と岩波講座の論文で、自分の探るべき方向がいくらか見え始めたと思っています。だけど、まだ本当には見えきっていません。

【海外留学 ヨーロッパ】

早川 じゃあ、先に進んでいいですか。1976年に留学されるわけですけれども、海外で何を学んで来られたか。また大原研究所をIALHIに参加させ、今でも大原社研は日本で唯一の加盟機関ですが、それについてもちょっと話していただけますか。

二村 1976年8月に出発して、1年7カ月かな、翌々年の3月31日に帰国したんです。8月に出たのは『日本労働年鑑』の執筆義務を果たしてから出れば、1年以上いられると考えたからです。実は、短期ですが留学できそうな機会がその数年前にあったんです。その時はうまく行きませんでした。いずれ近い将来そうした機会があることが分かりました。その時いろいろ考えて、本を読むだけなら日本でも出来る。それよりなるべく多くの人と会い、意見を交換し議論することが大事じゃないかと考えたのです。それから留学まで3、4年あったのですが、英会話をかなり一生懸命勉強しました。おかげで、出発までにはわりあい自由に意思疎通できるようになりました。76年の春に、イギリスのウォーリック大学社会史研究所の所長ロイドン・ハリソン教授が来日し、何日かその案内をして、いくらか自信がつかしました。また、この

数年間に何人もの英会話の先生たちと仲良くなり、正月に家に呼んで泊めたりして、そのうちの何人かとはその後も親しくしています。その一人がテリー・ボードマンで、昨年僕の本を訳してくれた一人です。彼は、僕が留学中にたまたまシェフィールド大学の日本学科の大学院生になったりする偶然も重なり、たいへん親しくなり家族ぐるみのつきあいを続けています。

何を勉強したかと言われると、ちょっと困るんですけど、目標はいくつか決めて行った。一つは、外国の労働関係の研究所とかアーカイブスというものはどう運営しどうやっているかを見てこよう。これはイギリスを中心にしてヨーロッパにも行ったりしたときかなり積極的に見てまわりました。ウォーリックのモダン・レコード・センターはまだ新しい組織でしたけれど、そこのリチャード・ストーリーというアーキヴィストが親切で、いろいろ教えてくれ、これは勉強になった。イギリスには、全国の資料目録情報を集中的に集めているセンターがあってね、The Royal Commission on Historical Manuscriptという名称だったと思うけど。そこに行けば、書簡などイギリス中の整理済み史料の所在情報が手に入ることとか、IALHIの存在を教えてくれたのも彼です。

僕が籍をおいた社会史研究所は労働史研究の巨人E.P.トムソンがつくった研究所、というが実質は大学院です。もっとも、僕が行った時には、もうトムソンは辞めた後でしたが、その後労働史研究会の会合で会うことができました。慶応の松村高夫さんには博士論文の最終段階のお忙しい時だったのに、家族もふくめてたいへんお世話になりました。ウォーリック大学には労使関係研究所もあり、そこでのセミナーにも出て、ヒュー・クレッグやジョージ・ペイン、リチャード・ハイマンらの話を聞いたり、自ら「トロツキストの経営学者」と名乗る若い研究

者の話を聞いたりしました。正直のところ、社会史研究所のセミナーより労使関係研究所の方が面白かった。この研究所は、国の研究財団的存在であるSSRC（社会科学研究協議会）が設立した研究所で、所長は公募制、5年ごとに研究所の業績を評価しダメな場合は廃止される、という思い切った性格の研究組織で、活気に満ちていました。全体にイギリスの研究所や学会はゆったりと学問していると感じましたが、この研究所だけは別でした。

IALHIは、International Association of Labour History Institutionsの略称です。日本語にすれば、労働史研究機関国際協会とでもいいでしょうか、労働関係文書館のアーキビストの集まりですね。その創設者で責任者をしていたのが、イギリス労働党文書館のアイリーン・ワグナー女史です。大原研究所の話をしたら、まさにIALHI向きの機関だから、ぜひ入れと言われ、日本に連絡してすぐ入会した。

早川 留学中いちばん印象に残ったことは？

二村 それは、西ベルリンに1週間余り滞在して、毎日東ドイツに通った経験ですね。ある意味で、留学中の最大の成果というか、印象深い体験です。さっきも言ったように、僕は各国の研究所や文書館を見ようと思っていましたから、東ベルリンのML研究所に行こうと計画を立てていた。それで宇佐美さんに、紹介状を貰っていた。直接でなく、独日友好協会への紹介状だったけど。

しかし、東ドイツへ入った1日目からこれは社会体制として駄目だと感じました。理由はいろいろあるけど、印象的なことでいえば町に若い男の姿が全然ない。若い男は兵営と検問所にしかいない。毎日、チャーリーズ・ポイントという検問所を通過して往復したのですが、ここを通る度に西ドイツマルクを東マルクに替えさせられる。正確な記憶じゃないけど、闇だったら

3対1か4対1か、とにかく西マルクがずっと高かったんだけど、1対1のレートで替えさせられた。それはいいんだけど、戻る時に東マルクが残っていても西マルクには替えてくれない。入る時は必ず一定額以上の東マルクに替えさせられ、戻るときにはそれを替えてくれない。またこれは行く前から知っていたことだけど、ベルリンの壁そのものの異様さね。西の方は壁まで行けるし、落書きがいっぱいあるのに、東側は高い監視所があり人は近寄れないようになっている。東ドイツ社会主義はどうか間違っていることを実感させられましたね。

東に入ると僕はすぐ独日友好協会に行ったんです。ただ紹介状を貰ってから10ヶ月も経っていたものですから責任者が代わっていて、僕が行くことは引き継がれていなかった。だから研究所へは案内できないというんです。しょうがないから、「それじゃあいいです、僕は明日ML研究所に直接行って見せて貰いますから」と言ったんだ。そしたら彼女が青くなって、「そんなことは絶対やめてくれ、私の責任問題になる」と言うんだ。それまでヨーロッパのどの研究所へ行っても紹介状や予約なしで見せて貰えたんだけど、東ドイツだけはダメだった。そのほか、ガイドブックでお勧めのレストランに行ったときもビックリした。見かけは僕が入ったこともないような高級レストランです、味はそれほどではなかったけれど。後ろにブラックスーツを着たウェイターが立ってサービスしてくれる。もちろん、高いチップを取られた。しかもトイレの中にもおばあさんが座ってて、チップを出さないと使えない。話には聞いていたけど、ヨーロッパの他の国でそんな体験をしたことがなかったから、ちょっと不愉快になった。外貨獲得のため、西から来た奴からは搾られるだけ搾ろうということだったんでしょうけど。まだ、いろいろあるんですけど、東ベルリンの見聞は、

留学全体を通じて印象強烈でしたね。おそらく「お客さん」として行ったのでは、けっして経験できない貴重な体験だったと思います。

【海外留学 アメリカ】

二村 アメリカでは3カ月ごとに本拠を変え3カ所に行きました。初めがミシガン大学、つぎがハーヴァード大学、最後にカリフォルニア大学のバークレー校です。それぞれの日本研究所にあらかじめ手紙を書いて、受け入れて貰っていた。白井泰四郎さんにエズラ・ヴォーゲルやロバート・コールに紹介してもらってね。いまハーヴァード大学ライシャワー研究所の所長をしているゴードンさんとは、この時に知り合った。彼はハーバードの大学院生でした。たしか、東大音感の先輩だった綿貫譲治さんが教えに来ていて、彼がゴードンに僕のことを、日本労働運動史の研究者だから話を聞けと言ったらしい。アンディは博士論文の執筆のため来日する直前でした。僕は彼を燕京図書館につれて行って、まず僕の「文献研究」の論文を教え、これとこれを読めと言って兵藤さんや池田さんの本を紹介した。1年半ほどの間に、いろんな人といろいろな形で会って、ずいぶん議論しました。本を読むんじゃなくて、議論できるようにすることに重点を置いた準備をしたことは、正解だったと思います。

五十嵐 研究面ではどうですか？

二村 長期的には比較的研究を進めるための材料集めをしたことなどいくつかあるけれど、短期的な成果は高野房太郎研究です。ワシントンの国立公文書館に行って、房太郎が帰国したときに乗ったマチアスという砲艦の航海日誌を見つけたんです。それで、高野がアメリカ海軍に就職し、食堂のウェイターとして働いていたことや、その船が、何時、どこをどう回って日本に着いたのかといった経路もきちんと分

かりました。それまでも房太郎がアメリカの軍艦に乗っていたことは分かっていたんですけど、なぜ乗っていたのか、どこで何をしていたのか分からなかったんです。日清戦争を報道するための新聞記者として乗っていたのではないかと推測した人もいましたが、実際は日本に帰る時に、只で世界各地を見て回り、金も稼げる軍艦を選んだらしいことが確認できました。それを材料に、帰ってすぐ『日本社会運動人名辞典』の高野房太郎の項目を書き、「職工義友会と加州日本人靴工同盟会」という論文も書きました。正直のところ僕自身は自分が書いたものの中では、この論文が一番気に入ってるんです。というのは、あれは一種の謎解きなんです。それまで隅谷三喜男先生は、高野房太郎は職工義友会の中心メンバーじゃなかったと主張されていた。それは、『労働世界』にのった労働組合期成会の歴史が義友会の創立年を1年間違えていたからなんです。それを関係者の旅券の発給日時などから論証して、明快に謎を解いたんじゃないかと自負しています。

【労働運動史研究会のこと】

早川 いま「職工義友会と加州日本人靴工同盟会」を気に入っているとおっしゃったんですけど、それを載せた労働運動史研究会の機関誌が売れなかったこととか、二村さんがその当時労働運動史研究会の事務局長をしておられたことなど。

二村 労働運動史研究会はずっと僕の勉強の場でした。研究会のことや会と僕との関わりについては「労働運動史研究会の25年」と「事務局局長落第記」という2つの文章を研究会の会報に書いていますから、詳しくはそれを読んでいただければ幸いです。

事務局長の話は、留学から帰ってきた時には事実上決まっていたんです。中林賢二郎さんと

高橋彦博さんが相談して、二村にやらせようと決めていた。僕は何とか断ろうとしたんですが、中林さんには留学中いろいろ迷惑をかけていたし、高橋さんには年鑑の執筆を代わって貰っていた義理もあって引き受けざるをえなかった。

事務局長としてやった最初の仕事が、『黎明期日本労働運動の再検討』の編集なんです。それまでの編集長の松尾洋さんや中林さんは、もともと運動家ですからマーケットに合った編集をしていたんですが、僕は担当編集者の佐方信一さんに「たまには売れない本を出さなきゃ」なんて言って編集したものですから、実際に宣言通り売れなかったんですね（笑）。それで、たちまち労働旬報社から、機関誌を出すのは勘弁してくれと言ってきた。『労働運動史研究』をつぶしたのは僕なんです。それでその後は、タイプ印刷の『会報』にして細々と続け、1984年にアメリカに行くことになった時に明治大学の栗田健さんに後任を引き受けてもらったのです。

実は80年代も後半になると、研究会に来る人が少なくなって、実質的に栗田健さん、高橋彦博さんと僕が中心になってしまった。『社会・労働運動大年表』の編集や執筆に参加されることになる若い人たちも少しは来てたけど。ただ、僕らがこの頃議論してたことは、お互いに影響しあっているんじゃないかな。栗田さんが『日本の労働社会』という本を書いたけど、あれは『イギリス労働組合史論』からストレートには出てこない理論でしょう。いくらかは労働運動史研究会での僕などとの議論が反映して出来たものじゃないかな。僕の方も、あの理屈屋さんと議論することは大いに勉強になった。

【研究所創立60周年】

早川 1979年に研究所は創立60周年を迎えたわけですね。当時、何をやるかという議論

をしてレセプションを一つやりましょうということで、貴重書の展示会をやることになった。「また展示会か」というふうに、二村さんはぶつぶつ言いながら、結局、展示会は二村さんの担当ということで、八重洲ブックセンターで開催した。これは、非常に好評だったわけですね。

二村 そう、展示会は二度と嫌だと繰り返していました。ただ、記念事業となるとやっぱりそれしかないということで稀覯書の展示会を開いた。もっとも、中心になられたのは一橋大学の松川七郎さんで、本を選んだり、解説文を書くことはほとんど松川さんがやって下さった。もっともドイツ関係の一部は良知力さんにもお願いしたかな。僕がやったのは会場や展示ケースの確保、本やキャプションを並べるといったこと、それに宣伝用の座談会を開いて、『図書新聞』に掲載して貰った程度です。あとひとつ、「稀覯書」では分かり難いので《秘蔵貴重書・書簡特別展示会》というネーミングを考えた。

60周年記念事業としては、ほかに『写真で見るメーデーの歴史』を出しましたが、この編集は早川さんの担当だった。

僕個人としては、60周年よりは70周年の記念事業の方が忘れがたいところがあります。大原社研として最初の国際シンポジウムを開いたのですから。ドイツ、フランス、オーストラリアの3国から講師を招き、「外国人労働者問題と労働組合」をテーマに多摩キャンパスの国際会議場で開いて盛会でした。講師の招聘については経済学部の森廣正さん、長部重康さん、早稲田大学の鈴木宏昌さんにお力添えいただきました。予算がないのに3カ国語を使っただけの国際会議でしたから、社会学部の相良匡俊さん、経済学部のアン・ヘリングさんにタダで通訳をお願いするという始末でした。『大原社会問題研究所雑誌』の特集号に掲載しただけで、本にまと

められなかったのは残念でしたが。70周年記念としては、このほか《戦後社会運動資料》と《労働関係文献データベース》の2つの長期的な事業をはじめました。

【『足尾暴動の史的分析』のこと】

早川 このへんで先に進みましょうか。足尾暴動の研究を再開されるのが81年3月の論文で、「足尾暴動の基礎過程再論」の辺から始まっているわけですね。

二村 80年館に移転したのが81年の3月で、この頃になると研究所の専門図書館・文書館としての活動は完全に軌道に乗り、もう僕が出る幕じゃなくなった。一方僕は、人には争議研究を呼びかけながら、自分自身では20年以上昔に「基礎過程」を書いただけだったのが気になっていました。「基礎過程」だけでは、研究として不十分だということは自覚していましたから。それに、この20年間で、その存在は分かっているが使えるなかった資料が、古河鋳業の社史や栃木県史の刊行で、いくらか使えるようになっていましたので、研究を再開したんです。間もなく、東大工学部に学生の卒業レポートが残っていることが分かりました。これはすごく良い資料でね、毎年のように学生が足尾に行って製錬所や選鉱所に入って長期間実習し、それについて報告したものです。技術を中心に、労働条件や労働災害などのデータまで記録されているのです。このため、最初は3回か4回で終わらせるつもりだった『研究資料月報』の論文は8回にもなってしまいました。その他、「主体的条件」について4回、「原蓄期における鉱山労働者数」についても2回書きましたから、全部で14回にもなりました。

「労働条件」についての論文では、日本全体でも最も高い賃金を得ていた採鉱夫がなぜ暴動の主体になったのかを論じ、「主体的条件」で

は友子同盟が果たした役割を論じました。

早川 81年から再開して本になったのが88年ですから7年、正味6年かな？

二村 正味なら5年ですね。つまり85年の12月に「主体的条件」を書き終えた時に完結したわけです。これは、その前年に、トム・スミスがパークレーに呼んでくれたおかげです。皆さんが『大年表』の仕事に追われていたさなかに7カ月ほど自由な時間があったので書き上げることが出来ました。あれがなかったら、おそらく数年は先になったでしょう。もっとも本にするときには、「はじめに」と序章、終章を書いたから、やはり正味6年近くかかっていますか。

【『社会・労働運動大年表』のこと】

早川 80年代の重要な企画は『社会労働運動大年表』でしょうね。その企画決定のいきさつをちょっと話してもらえますか。

二村 あれはね、もともとは大原研究所の企画というわけではなかったんです。労働旬報社から、労働運動史研究会にというか、栗田・高橋両氏と僕に話があったんです。何がよいかいろいろ検討したんですが、結局大年表が良からうということになった。ただ、いずれにしても僕ら3人だけではとても出来ない、中心になって編集作業を分担してくださる若い研究者が何人か必要なことは明瞭でした。しかし、各人にそれほど多くの給与は出せない。しかもいったん依頼すると数年その人たちを縛ることになる。それには、単なる年表の編集委員では無理だろう。そうでなく大原社会問題研究所の役員になってもらえば、その人たちのキャリア・アップにもつながるから、人材を得ることが出来るかもしれない。また大原社会問題研究所としても、『社会・労働運動大年表』が出来れば、のちのちまで残る財産になるだろうと考えた。

そこで舟橋所長や高橋さんと栗田さんに相談したところ、すぐ了解してもらえ、最終的に大原研究所の事業としてすすめることになった。簡単にいえば、こういう経過です。編集担当の佐方信一さんや吉田さんはじめ、多くの方の犠牲の上でようやく刊行できた大事業です。この大年表のことは、僕より皆さんの方がよくご存じなわけで、これはそれぞれの立場で、お話しただく方がいいでしょう。

五十嵐 『大年表』は大変なプロジェクトで、私は第三巻を担当しました。編集会議も多かったのですが、それには皆勤したと思います。会議後の飲みながらの反省会を一回も欠かさなかったのは二村先生と私くらいでしょう。執筆した解説項目も私が一番多かったように思います。おかげさまで、原稿料をたくさんいただきました。

無理して時間を割いたために、家庭的な問題も引き起こし、個人的にも苦労しましたが、大変勉強になりました。編集委員同士や研究所のスタッフとも交流が深まり、一体感のようなものが生まれ、楽しくやりがいのある仕事だったと、今では思っています。『大年表』は、私自身のその後の研究や仕事でも大いに役立っていますし、研究所の大きな財産になったと思います。

吉田 僕が大原社研の業務に加わったのは1979年4月に産別会議の資料整理・研究のプロジェクトに参加してからです。その産別会議の資料整理に区切りがついた1983年の1月下旬、二村先生から電話がありまして、『大年表』の仕事を手伝ってくれないか、条件は週2回勤務で給与は月額6万円だ、ということでした。先生が、年表の編集に従事する人を研究員として採用すればキャリア・アップにつながるだろう、ということをお考えと言われましたが、僕もそれを期待し、また自らの研究領域も広がる

だろう、ということで引き受けました。

僕は『大年表』では第2巻を担当しましたが、編集作業は大詰め新时期は筆舌に尽くしがたい大変さで、ホテルや大学の施設に泊まり込んでの作業がつづき、子供の脳外科の手術にも立ち会えませんでした。『大年表』は版を重ね、新版も出て多くの方に広く利用されています。先生はいま「『社会・労働運動大年表』が出ればのちのちまで残る財産になるだろう」ということで刊行を決意されたということですが、たしかに『大年表』は研究所の財産になっておりますし、研究所の名声をいちだんと高めたと思います。けれども、僕にとりましては、40歳前後の大事な時期に、数年間もあの仕事に専念しました。十数年たった今も後遺症が大きく、とてもあの頃を懐かしい思い出として語る気持ちにはなれないのです。

三宅 私は第1巻の編集を担当しました。第2巻や第3巻との一番大きな違いは、ページの割り振り方が、時間 - 直接には年で区切るよりも、労働運動や社会運動の実際にあわせて、たとえば労働争議が多発した年はページが極端に多いといった形になっていることだと思います。あの時点での労働運動史や社会運動史の研究状況を直接に反映している。現在だと、例えば戦時下などまた少し異なったページの割り振り方があるようにも思います。年表自体が歴史的な性格をもつことをよく示している作品でもある。

【大原社研所長に就任】

早川 85年4月に研究所の所長に就任されていますね。久留間所長以来久しぶりの専任研究員からの所長でしたが、その時のことを。

二村 実は、84年の4月に舟橋さんから交代してほしいと言われました。ただその時は「アメリカの大学から呼ばれていますので」とお断

りました。ですから、帰ってきてすぐに再度所長就任の話が出た時は、覚悟を決めて引き受けたのです。

所長になってすぐ取り組んだのは『日本労働年鑑』の改革でした。ちょうど早川さんがイギリス留学中でしたので、佐藤博樹さんといっしょに編集に当たりました。85年暮に出した第56集です。もっともこの時は、それまでの箱入り本をカバーに変え、目立つ腰巻きをつけたこと、巻頭に置いていた「労働日誌」を巻末に回し大年表に合わせて6欄構成の年表形式にするなど、形式面での改革が主でした。しかし、これを引き継いで、次の第57集では、早川編集長のもとで大幅改革を実施しました。具体的には、収録期間を刊行年の前年7月から同年6月末までだったのを、前年の1年間と暦年にしたほか、3部構成を5部構成に変えました。

年鑑の話になったついでに、僕と労働年鑑とのかかわりについて付け加えておきたいと思えます。年鑑は35集からは中林さん、43集からは早川さんが編集長で、僕は一執筆者に過ぎませんでした。ただ立場上、誰も引き受け手のない章を受け持たざるを得なかった。だから年によって書いた章は違いますが、社会運動とか経営者団体、それに政党などを受け持ちました。最初は苦労しました。もともと、書くのはあまり好きじゃなかった上に、僕が担当した組織や運動に関する章は、統計主体の章と違い、自分で大量の情報を集め、それを限られた期間内にまとめ上げなければならなかったから。とくに第56集まではその年の春闘をカバーするため締め切りが8月上旬だったから、暑いさなかに四苦八苦しました。社会運動などは苦労して材料を集めても、なかなかうまく書けなくてね。そこで、他の人の書いたところを読んで、年鑑執筆のコツを盗もうとしたんです。このとき大島先生の「農民運動」で大いに勉強しました。彼は

実に要領よくさっさと書いてるんです。どうすればそんな風に見えるのかを検討したんです。そうしたら、大島さんの章は、僕のようにだらだらしていない。小さなコンパクトに書いた節を積み上げて、まとめているんです。これで年鑑のようなものでは、型が大事だということを理解しました。ちょうど「政党」を分担しはじめてしばらくしてのことです。おかげで書くのがだいぶ楽になりました。いずれにせよ、毎年毎年、200字詰めで数百枚も書かされたことは、文章修業としても大いに役立った。

年鑑改革とならんで試みたのが機関誌の改革でした。実は、前から機関誌の改革についてはいろいろな意見があったんです。そのなかで有力だったのは、月刊誌をやめて季刊の研究雑誌をつくらうという意見でした。60周年の頃は、それで行こうという意見で固まりつつあったんです。その時、確か増島宏さんが学務理事だったと思うけど、予算問題でやりとりした時に、せっかく第三種郵便になっているのにそれを捨てることはないと言われ、季刊をやめたんです。これは正解でしたね。月刊誌だから続いているので、季刊になると毎回本をつくるようなもので、おそらく続かなかったと思う。

だから僕が所長になる前から機関誌の改革は問題になっていたんです。80年代はじめには、表紙を白からピンクに変えたりしてね。ピンクの表紙は僕は気が進まなかったけれど、佐藤博樹さんや三宅さんなどに押し切られた。さらに86年4月には、誌名を『研究資料月報』から『大原社会問題研究所雑誌』に変えました。同時に、その性格も研究所の紀要ではなく社会・労働問題の研究雑誌をめざして、市販することにしました。「タダで配ってはいけない」と厳命してね。正直のところ、専任研究員3人だけの研究所が、月刊の機関誌を自力で出す力のないことは明瞭でした。社会・労働関係の研究誌と

したのは、悪くいえば人の牛蒡で法事をするようなところがありますが、これもアメリカの専門誌の多くが、大学から刊行されているのを真似した形です。日本の大学は紀要は出しても専門雑誌は出さないから、わりあい狙いは良かったのではないかと考えています。その後、雑誌は早川さんや佐伯さんなどの尽力で社会・労働関係の専門研究誌として、内容を充実させていることはご承知の通りです。

吉田 『研究資料月報』を戦前に出していたものと同一タイトルの『大原社会問題研究所雑誌』にしたのは、どういう理由からですか。

二村 誌名についてもさまざまな意見があり、『労働問題研究』とか『労働と社会』とかいろいろ案が出た。しかし最後は『大原社会問題研究所雑誌』というのが、戦前にも使って名前が知られているし、研究所名のPRにもなるし、収録する論文も幅広くすることができるし、良いじゃないかと意見が一致したんです。

【向坂文庫の受贈】

二村 もうひとつ、研究所にとって大きな意味をもつことになったのは、向坂文庫の受贈です。これは、われわれが積極的に働きかけていただくことになったわけではなく、いわばあちらから飛び込んで来た話でした。1985年の1月、僕がアメリカにいた時に向坂逸郎先生が亡くなりましたのですが、その蔵書を大原社会問題研究所で引き受けて欲しいという話が、ご遺族から有沢広巳先生を介して舟橋さんのところに来たのです。向坂先生は人も知る愛書家で、その蔵書はマルクス主義文献を中心に7万冊という大コレクションでした。それをまったく無償で大原社研に寄贈して下さるといふ、願ってもない話でした。さっそく青木総長はじめ大学理事会とも相談し、いただくことに決めたのです。

実は、僕は、向坂先生の蔵書のことによく知

っていたのです。先生は研究所が毎年開いていた高野岩三郎・柳田民蔵両先生の追憶会の常連の一人でしたが、僕は、68年に向坂先生が学生時代に筆記された高野先生の講義ノートをいただきに伺ったのを最初に、復刻のための原本探しや、50周年記念展の展示品を拝借するためなど、何回もお訪ねしていました。先生のお宅は、区は違いますが僕の家隣の隣町にあり、自転車なら僅か10分程度のところなのです。広い庭のはじめに トーチカ とあだ名された書庫があり、書齋にしておられる座敷はもちろん、別棟の建物の天井裏にまで、原資料類が山積みでした。失礼な言い方になりますが、向坂先生は愛書家でしたが、図書資料の保存についてはいささか無頓着なところがありました。トーチカは防火の面では完璧でしたが、湿度が高く、そこに本を詰め込み過ぎておられました。また、お宅は畑の真ん中ですし、物的条件もないから無理もないんですが、図書や資料の保存状態はあまり良くなかったのです。とくに天井裏に置かれていた資料は、砂ぼこりをかぶって埃焼けがひどく、貴重な文書がこのままではダメになるおそれがありました。そこで、僕は家から掃除機をかついでいって天井裏を掃除したり、むき出しの新聞を袋に入れたりといった作業もやりました。その時は、まさかこれが大原研究所でいただくことになるとは、思ってもみませんでした。ですから、僕はわりあい先生に信用され、何時でも自由に書庫に入ることを許されていました。だから、ゆき夫人も僕のことをよくご存じて「二村が所長なら安心だ」とおっしゃっていただいたのです。この向坂文庫の受贈は、研究所にとってさまざまな面でプラスになりました。膨大な図書資料をいただいたということだけでなく、その整理のためにパソコンを入れたり、研究所の仕事のスタイルを変えるのにも役立ったのです。

【財団解散と多摩移転】

早川 つぎは、研究所の多摩校地への移転と、財団法人解散問題ですね。

二村 これも、どちらも研究所が積極的に決めたことではなく、ある意味では押しつけられた形の話です。移転問題についていえば、僕らは、法政大学が全面的に多摩校地に移転しても研究所は市ヶ谷に残れると思いきんでいたんです。というのは、80年館を建てた時には、すでに多摩校地への移転方針は決定されていたんです。たしか組合との団体交渉の席での話だったと思うのですが、「何で移転前にわざわざ隣の土地を買い、こんなに大きな建物を建てるんだ？」と聞かれた理事会側が、「そうなれば、大原研究所がこれを使って活動すればよい」と答えた、といったことがあったんです。もっとも「80年館は全部大原にやる」といった約束があったわけじゃありません。しかし、僕らはこれを聞いて、大原研究所のように外部利用者の多い研究所は都心の便利な場所にあるべきだと考えていましたから、大喜びし、学部全面移転を心待ちにしていたのです。

ところが、82年の秋、80年館に移ってすぐ、経済学部教授会と社会学部教授会から、大原に多摩移転要請が来たんです。要するに、経済・社会両学部が移転するのであるから、関連の深い大原も多摩に移れ、同時にもっと開かれた研究所にせよという要望書が来たのです。この時は予想外のことで大騒ぎになった。全体とすれば移転反対論が強かったんだけど、最後は、多摩へ移ればこれまでとは格段に違う広いスペースが手に入ることが明らかになったから、移転を決断したんです。80年館の研究所は大学院の5階の時とは比べものにならないくらい広くはなりましたが、すでに書庫は満杯で新館や川崎校地に本や雑誌の一部を移していただくくらいでしたから。麻布分室を設けたことが研究所の発展

につながったように、多摩への移転もさらなる発展の条件となると考え、僕は移転方針に転換したのです。両学部には、舟橋所長名で、多摩移転と大原研究所をより開かれた研究所にすることを約束する回答書を出しましたが、あれは僕が書いたものです。

もう一つの財団法人の解散は、さっきお話しした社会労働問題研究センター問題とからんでいます。これも82年の秋に会計検査院の監査がありました。そこで大原社会問題研究所と社会労働問題研究センターの二重組織性が問題になったのです。結局、4年後の次の次の監査までには大学の付置研究所にすることを約束させられました。多摩移転と同時に財団法人を解散し、法政大学の付置研究所に改組したのは、こういう事情があったのです。財団解散については、監督官庁である文部省の担当官が、解散理由に文句をつけたりして、けっこう面倒くさいやり取りがあったのですが、86年3月に解散が許可されました。

【労働資料協のこと】

早川 労働資料協については、あまり知られていないので、ここで話していただいたほうがいいのではないのでしょうか。初代の代表幹事が二村さんで、今は私が引き継いでいるわけですが。

二村 分かりました。正式名称は 社会・労働関係資料センター連絡協議会 というのですが、この組織をつくるきっかけとなったのは、1980年にパリのユネスコで開かれた 第1回労働運動と労働者階級に関する国際フォーラム という名の研究会議です。私は留学中の77年に、ミラノで開かれたこのフォーラムの準備会に出席した縁でこれに参加したのですが、この席で戸塚秀夫さんに会いました。そこで彼が言ったのは、労働戦線の再編などで、いま組合の資料

がどんどん廃棄されている。これを何とかするためには、関係する諸機関が協力して、問題に対応できるネットワークをつくる必要がある。これには僕も異論がありませんでしたから、しばらくしてこれを社会政策学会の幹事に提起したのです。たしか、兵藤さんが代表幹事の時です。その結果、学会とは別個に組織をつくるが、その立ち上がりまでは財政的に援助してくれることになった。当時は東大社研の助手だった東条由紀彦さんが縁の下の力持ちをつとめてくれました。その後2年あまりの準備期間を経て、86年5月15日に正式に発足したのです。この日を選んだのは、大原研究所の多摩移転と向坂文庫受け入れの披露のパーティを開いた日ですね、社会労働資料協議会の発足と重ねることで、人集めをはかったわけです。はじめは意識的に規約を制定せず、「設立趣旨」だけでしたが、それだと国立大学などが会費を出すのに具合が悪いといったことがあって、93年に会則を制定し、代表幹事にもなりました。それまでは、事務局担当の世話人という形でした。事務局担当といっても実務はほとんど大原研究所の若杉隆志さんをお願いしてきました。参加機関にあまり負担をかけず、情報提供や重複図書資料の交換などを実行しています。全国の広い意味での社会労働関係図書館資料館のゆるやかなネットワークで、いわばIALHIの日本版ですが、そのはじまりは80年のパリでの戸塚・二村の雑談に端を発しています。

【「企業別組合の歴史的背景」】

二村 ここで、自分自身の研究についてもいくらから付け加えさせてください。研究面でひとつの転機になったと思うのは、83年11月に僕がコーディネーターになって開いた公開講座「企業別組合論の再検討」なのです。2日間開き、1日は栗田健さん、もう1日は僕が報告をし

した。テーマは「企業別組合の歴史的背景」で、これは僕としては初めて戦後の労働組合運動を取り上げたものです。そのポイントのひとつは、企業別組合といっても戦前と戦後とは性格が違うという点を強調したことです。戦前の組合は企業別組合というより事業所別組合であり、ブルーカラーだけの組織だったが、戦後の組合はなにより工職混合組合であり、最初は事業所別であってもすべて企業単位に再編成されていたことを指摘しました。それと企業別組合の生成要因についての通説だった大河内さんや白井さんの労働市場決定説を批判したのです。つまり、労働市場が企業別に分断されていたから労働組合は企業別になったのだという見解では、工職混合組合である事実を理解できないと指摘したのです。なぜなら、ブルーカラーとホワイトカラーの労働市場がまったく別個のものであることは明らかなのですから。

それに対し僕が主張したのは、日本におけるクラフト・ユニオニズムの伝統の欠如でした。これで、その後の僕の研究の方向がやや明確になったと言ってよいと思うのです。

早川 これは多摩キャンパスで開いた社会政策学会の大会での二村さんの報告「日本労使関係の歴史的的特質」ともかなり重なってますよね。

二村 はい。実は『足尾暴動の史的分析』も第1章と終章はこれに依拠しているんです。

早川 二村労使関係論の一つの理論的フレームワークが出来た。

二村 理論的と言えるかどうかは分からないけれど、日本の労働組合の特質を戦前・戦後の違いも含めて理解できたように思いました。このように考えると、日本の労使関係の謎がいくつか解けると感じたのです。これは、その後の僕の研究、比較的最近の「日韓労使関係の比較史的検討」にまでつながっています。この後、

何回か外国で日本の労使関係史について報告する機会がありましたが、大体この筋でやっています。この考えがまとまってきたのについては、外国人研究者との議論の積み重ねが役だっています。どうしても日本の労使関係の歴史的な特質の説明を求められますから。特に、トム・スミスとの議論からは学ぶことが多かった。彼は僕をパークレーに呼んでくれた人なんですけど、もともと徳川時代の農村史の専門家ですが、なぜか労働史に関心をもち、それで僕を訪ねてきたんです。大学院の建物で会っているから、70年代末のことですね。彼の代表作である『近代日本の農村的起源』の訳者のひとり大内力さんに頼まれたと言って経済学部の佐々木隆雄さんが連れてこられた。彼は穏やかな人柄ですが、質問はとても鋭く、その問いに答えるなかで、いろいろ気づかされました。

五十嵐 二村先生の議論の中で、僕の印象として強いのは、人格向上要求とか、社会的地位や差別の問題が日本の労働運動の場合、非常に重要であるという提起ですが、この「モラル・エコノミー」への関心は、75年の岩波講座の論文のあたりでまとまったんでしょうか。

二村 まだです。そこに問題があることには気づいてはいましたが、もっと筋道をたてて理解できたと感じるようになったのは、「企業別組合の歴史的背景」からです。

五十嵐 足尾暴動研究とのかかわりはどうなんですか？

二村 もちろん足尾暴動研究とも無関係じゃない。足尾暴動は端的に言えば、いちばん高い賃金をとっていた熟練職種の労働者が、職制を懲らしめたものでした。窮乏化論では理解できないこうした事態がなぜ起こったのか、この疑問を解こうとしたのです。一般に危険の高い地下労働に従事している鉱夫の社会は非競争的な性格をもっています。しかし、そうした職場で

さえ、労働者は 役員 になりたがり、役員になった奴は急に仲間を見下すような態度をとり、賄賂を要求したりする。そうした問題がなぜ起きたのかということを追及し、僕はそこにクラフト・ユニオニズムの伝統の欠如といった日本の労働社会に共通する特徴を見た。つまり、鉱山という、労働者間競争とは遠い社会においてさえ、そういう競争的な関係が存在したのですから。

五十嵐 なるほど。もうひとつ日本の労働組合組織率が国際的な基準からすると数パーセント低くなっている事実を指摘されましたが、あれはどこからヒントを得たんですか。

二村 あれは年鑑を書いたから。

五十嵐 『日本労働年鑑』ですか。じゃあ、足尾研究や鉱山労働者数の研究などと直接の関係はないんですか？

二村 僕は、いろんな仕事の中で統計資料の吟味をしているんです。

三宅 その辺は、さっき出た岩波講座日本歴史の中でも、『工場統計表』と『工場監督年報』を比較検討して、労働者数のデータとして一般に使われていた『工場統計表』の数値には脱漏があることを指摘されているんですね。あれは80年代の鉱山労働者数や実質組織率の論文などとつながっているように思うんです。

二村 歴史研究者としては、史料の吟味は常識です。しかしなぜか統計については、自説に都合のよい数値があると、検討抜きに使う場合が少なくない。だけど、統計は集計方式や定義によって結果が大きく異なることがある。そうしたことを感じているので、統計を使う時は、その吟味から始める癖がある。たぶん僕の論文の3分の1ぐらいはそんなことをやってるんじゃないかな。

三宅 別の質問ですが、例の「足尾暴動の基礎過程」のときは、日本の労使関係の把握に際

してどちらかというと普遍性に重点があった。つまり大河内説は労働市場の型論で、普遍性を欠いている。これに対し、生産過程こそが重要であると、まさに普遍性を強調する議論をやられている。ところが、現在の議論は、全く逆転しちゃってて、むしろ国民経済の型こそが重要なんだという議論になっている。表面的にみれば、明らかに逆転しちゃってる。この点をどう思われるか、ちょっと伺いたいです。

二村 それは、明らかに逆転してますよ。僕が最初に大河内批判をやった時は、世界的に普遍的な法則が日本でも貫徹することを論証するつもりでしたから。ただ、そこで、他の人ではなく、大河内さんを問題にしたことには意味がある。僕は、日本的な特質を明らかにする必要があるという大河内さんの問題意識そのものには共感してたんです。ただ、逆転したとはいっても、自説を翻したわけではない。本にまとめる時、30年前の「基礎過程」を、言葉遣いこそ訂正していますが、論旨はまったく変えていないのです。僕は、普遍的なるものの追究と一国の特質の解明とが二律背反するとは考えない。国によって異なる個性を明らかにすることが、より普遍的なるものの解明につながると考えているんです。

三宅 88年の『足尾暴動の史的分析』終章のところはやっぱり問題ではないですか。近代的な国民経済の枠組みができる中で労使関係のあり方が国ごとにどう違っていかといった場合に、伝統社会のあり方がそれを一義的に規定するという方向になってしまっていて。伝統社会の影響を論じるにしても、もう一回普遍的な次元でとらえなおして、その上でなぜ違いが出てくるか、国民経済や労使関係の国ごとの特殊性に迫るといって、そういう議論でないと。見通しはいかがでしょうか。

二村 そうした見通しが無いわけじゃないと

思ってる。そのためには、もう少し国際比較をきちんとやる必要があると考えています。それと、日本の近世社会の特質の解明もね。その二つの問題を明らかにする作業を並行してやろうと思ってます。だから、僕自身は、それほど矛盾した行き止まりの道に入っているとは思っていない。

早川 経済学者には、オリジン説といって、批判的に言う人もいるんだけど。

五十嵐 オリジン、要するにどんどん歴史をさかのぼって源までいっちゃうわけですよ。歴史的な制約条件を追っかけていくと、その根源までいってしまうことになるのではないかということ。それと、そうなってくると、ある種の運命説というか、過去から派生する諸条件に制約されて現在の状況が形成されるという話になっちゃって、過去によって現在が運命づけられるというような感じになるんですね。

二村 それほど単純な議論をしているわけじゃない。

五十嵐 まあそうですね、単純化すればそうなるということもあるんじゃないでしょうか。

二村 僕は日本の労使関係の特質をクラフト・ユニオニズムの伝統の欠如だけで論じているわけではありません。その後の歴史的变化、例えば、第二次大戦の敗戦による改革を考慮に入れなければ、その後の日本の労使関係の変化は理解し得ないと考えている。また、前近代社会の伝統を考えることが、一部の人が言うようなラッキョウの皮むき、つまり研究課題をつぎつぎに古い時代に遡らせざるをえなくなると思わない。幕藩体制かせいぜい戦国時代に遡り、権力と職人組織の関係や組織の意思決定の特質などを検討すれば、課題はかなりの程度まで明らかにしうると考えています。また、日本にはクラフト・ユニオニズムの伝統がないか

ら日本の労働組合運動には展望がないといった宿命論的思考はしません。ただ歴史的な条件を無視した展望を出しても、成功しえないとは考えているけれど。もちろん、おっしゃるような理解をする人がいることは知っています。宿命論を批判したやつが、宿命論になっているじゃないかと言われるであろうことはね。

三宅 「足尾暴動の基礎過程」を書かれた時点と、最近の前近代社会の構造が問題だとされる状況との間には、マルクス主義的なグランドセオリーの影響力の変化といった点はありませんか。

二村 いや、それはないね。僕はもともと、そんなにごりごりの法則論者じゃないからね。最初からくそ実証主義でやってきますから。

三宅 ただ「足尾暴動の基礎過程」は、理論的にはものすごくごりごりとも読めますよね。もちろん実証の世界の問題があるわけだから別なんだけど、そこで採用されている仮説は。

二村 でも「ブルジョアジーは生産用具を、したがって生産関係を、したがって全社会関係を、絶えず変革しなくては生きて行くことができない」というのは普遍的な真理だと思うけどね。

三宅 話が飛ぶんですけど、前近代社会の問題を考えると、例えば「世界システム論」などをどのようにお考えですか。栗田健さん、兵藤釦さん、あるいは熊沢誠さんもそうだけど、60から上の人たちの労使関係・労働関係論は一国的な発展論が軸でしかもモデルは基本的にイギリスですよ。ただ、実際の歴史過程に置き直して考えてみると、イギリスのあり方が極めて特殊であって、それ以外の国の労働関係は、そもそも原生的労働関係とか、何とかという議論をすること自体がほとんど無意味なくらいですね。資本主義世界の中に入ったときには、原

生的労働関係であれ、あるいはもっと古い社会関係であれ、その中でしか存在しないような労使関係のあり方がある。

二村 僕もそれはそうだと思う。だから最近の議論では、欧米の労働組合のありようの方が、ある意味では特殊だと言ってるわけですよ。要するに、ギルドやクラフトユニオンのような特別な条件が存在したから企業の枠を越えた労働者組織が生まれたのであって、そうでない社会の場合には、労働者が毎日顔を合わせている職場を基礎に団結するのは、ごくごく当然だと。これは、きわめて単純な話だけど、実際そうじゃないかと考えている。本当はインドなど、ほかの国々の研究が進んでくれば、これまでの研究をもっと相対化できるんじゃないかと思っています。以前は僕も企業別組合は日本独特の組織というふうに言っていた時期もあるけれども、最近はそうじゃない。企業別組合はラテンアメリカでもそうだし、アジアのほかの国にもある、別にそんなに珍しい形態じゃないと言ってるわけです。ただ、おっしゃるとおり、これまでの労働問題研究は、圧倒的にイギリス・モデルで、そこからの距離でいろいろ論じてきた。年も多少は関係があるだろうけど、年齢だけの問題じゃないと思うけどね。

【最後に】

早川 あとは、二村さんから言い残したいことや、これからのご自分の仕事の予定などについてお話しただいて、終わりとしましょうか。

二村 この十数年間、研究所として力を入れてきたのは社会・労働関係文献データベースですよ。これはいろいろ知恵を絞り、人手とお金をかけてようやくものになりました。去年の2月からはインターネットを通じて一般公開し、27万件というデータ量の多さと、無料で論

文レベルの検索が出来る数少ないデータベースとして高い評価を受けつつあります。この一年間僕が担当してきた研究所のホームページも、データベースとともにリンク集が好評で、研究機関のホームページとしてはまあまあ水準になりました。この十数年「開かれた研究所」を目指して努力してきたわけですが、インターネットは日本国内だけでなく海外にまで大原社研のファンを増やしつつあります。実は辞めるまでにこれをもう一步進めて、デジタル・ライブラリーのサイトを立ち上げたいと思っています。ただこれを仕上げるには、おそらく最低10年はかかると思います。ぜひこれを完成させる体制を作り上げて欲しいと思います。

早川 ご自身は。

二村 僕自身は、個人のホームページ＝二村一夫著作集（<http://oisr.org/nk>）を出来るだけ早く完成させたいと考えています。あとは、高野房太郎の評伝と日本の労使関係の通史を書くことを計画しています。

五十嵐 大原研究所でなにかやり残したことはありますか？ それとも、やるべきこと、やりたいことはやり終えたのでしょうか？

二村 僕は、大原研究所では、やりたいことをやり、言いたいことを言ってきた。強引だし、きつい物言いはするし、周りの方にはずいぶん迷惑をかけたけど、言いたいことを言い、やりたいことをやらせてもらって来た。そういう意味では幸せだったと思ってます。デジタル・ライブラリーや復刻の別巻のように未完成のものはいくつもあるけど、それは皆さんにお願いするほかないし、やっていただけるものと思いません。

早川 正直なところ、歴史研究者である二村一夫さんと大原社研は、うまくフィットしてきましたね、最初から。

二村 僕が大原に入ったのが研究所創立50周

年の直前で、研究所の所蔵資料の価値が多くの人に認められ始めた頃だったから。さらに向坂文庫をはじめ、数多くのコレクションを受け入れ、労働関係の専門図書館・資料館として充実したものとなり、社会的にも評価されるようになった。ただ、そうした活動の中心になったのは僕じゃない。谷口さんはじめ歴代の資料系の職員の皆さん、数多くのアルバイトやパートの人などの力です。僕はほんの入口のところだけ、土蔵に死蔵されていた資料の所蔵状況を明らかにしただけです。それに、復刻や閲覧を重視したことで歴史研究所のように見られ、研究所の研究面での成果が過小評価されがちで、マイナス面もあったんじゃないかと思うけどね。

早川 若干はそういう声も聞こえるけれども。ただ、私の目として見れば非常に重要な役割を二村さんが果してきたのは十分評価してます。それから、パソコン時代には枝洋さんと一緒にもっていったこと、これは、みごとなものですよ。大原雑誌の二村さんの最後の論文が「インターネットと労働運動」（『大原社会問題研究所雑誌』1998年12月号）だったのは象徴的ですね。

二村 大原研究所がパソコン時代に適応できたのは、金がなかったからですよ。88年に文献データベースの構築を始めた時、パソコンに頼るしかなかったんです。ところがマシンの性能アップとインターネットの普及のおかげで、パソコンでも相当なことが出来るようになった。パソコンだったからこそ、パッケージソフトを加工して自分たちに合うシステムを構築し、たえず改善することが出来、おかげでシステムをブラックボックス化させずにすんだ。

ただ、研究所のコンピュータ化では、僕よりは枝さんや奈良明弘さんが果たした役割の方がはるかに大きい。僕がやったのはいくら金を工面したことと、ホームページを仕上げたこと

くらいです。ただ僕個人がいささか貢献するところがあつたとするなら、それは研究所の国際化かもしれません。この20年で法政大学大原社会問題研究所の名は海外にもずいぶん知られるようになったけど、その面では僕がいくらか貢献するところはあつたのではないかと自負しています。（完）
（にむら・かずお 法政大学大原社会問題研究所教授）

二村 一夫 年譜

年 月	二村 一夫 個人	大原社研ほか
1934年 2月	長野県松本市に生まれる。同年5月には上諏訪に移る	
39年 8月	東京市滝野川区田端町に移る	
40年 4月	滝野川第一小学校入学	41年12月 太平洋戦争
44年	春母方の郷里である長野県北佐久郡春日村に縁故疎開	45年 8月 敗戦
46年	春日小学校を卒業し、望月中学校に入学	
47年	長野県立諏訪清陵高校併設中学校へ転校	
48年	東京都立大泉高等学校へ転校	大原社研『資料室報』創刊
49年		大原社会問題研究所、法政大学と合併
52年	大泉高校卒業、東大教養学部へ入学	講和条約発効。『歴史と民族の発見』
53年		大原社研、新築の大学院棟5階に移転
54年	国史学科へ進学	『農民運動資料』『評議会婦人部論争資料』
56年 3月	国史学科卒業。卒論「初期社会主義=労働運動に関する一考察 足尾暴動を中心として」	
56年 4月	法政大学大学院政治学専攻入学。 大原社会問題研究所の資料整理、柏木の土蔵に通い、資料発掘	『日本労働組合評議会資料』その1刊行
58年	修士課程修了、法学部助手となる	
59年	「足尾暴動の基礎過程」	
60年 4月	東邦大学一般教養科講師を経て助教授（63年）	「我が国労農運動における社会民主主義の研究」に科学研究費
8月		「労働関係文献月録」を『月刊労働問題』に連載開始
66年 4月	法政大学大原社会問題研究所兼任研究員	久留間所長退任、宇佐美所長就任
67年 4月	同専任研究員。創立50周年記念事業として、復刻シリーズ《日本社会運動史料》の刊行を企画し、編集を担当	大原社会問題研究所麻布分室設置
68年 4月	50周年記念展の企画・構成・解説を担当	大島清所長就任
69年 2月		大原社会問題研究所創立50周年
3月		『新人会機関誌』刊行
5月		大原社研、バリストのため麻布で業務
70年 4月	この頃、福島大学、中央大学、東京大学で労働運動史を講義（～76年）	《社会運動の半世紀》展開催
71年 4月	この頃、関東・関西の主要私大の研究所視察	舟橋尚道所長就任
73年 4月		中林賢二郎氏社会学部へ、後任早川征一郎氏 麻布分室で所蔵図書・資料の公開開始 宇佐美誠次郎所長就任

12月	法政大学教授となる(センター設立による)	社会・労働問題研究センター設立
74年4月		大島清所長就任
76年	欧米留学に出発(8月～78年3月)	宇佐美誠次郎所長就任
77年8月	イギリス・ウォリック大学社会史研究所訪問研究員, アメリカ・ハーバード大学, ミシガン大学, カリフォルニア大学バークレー校各日本研究所の訪問研究員	大原研究所, I A L H I (国際労働史研究協会)に参加
78年4月	労働運動史研究会事務局長(～84年3月)	大島清所長就任
79年6月	ウォリック大学社会史研究所名誉研究員	創立60周年記念秘蔵貴重書展示会
10月	東京大学経済学部兼任講師	
80年4月	労働運動と労働者階級に関する第1回国際フォーラム(パリ)に出席。フランス, ドイツ, オランダ, イタリア, デンマークの労働関係の文書館や研究所を視察。パリ東洋大学で講義(～5月)	舟橋尚道所長就任 第1回公開講座
81年3月	このころ, 足尾暴動研究を再開	研究所, 新築の80年館3階に移転
4月	財団法人・大原社会問題研究所 評議員	
10月	一橋大学大学院社会学研究科 兼任講師	
83年4月	財団法人法政大学大原社会問題研究所理事 『社会・労働運動大年表』の企画決定	斎藤泰明氏退職, 後任に佐藤博樹氏 研究所理事会, 多摩移転, 研究所改組の方針を決定
83年11月	公開講座「企業別組合論の再検討」を企画し 「企業別組合の歴史的背景」につき報告	
84年5月	社会政策学会幹事(～90年)	
8月	カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所及び日本研究所の招聘で在外出講(～85年3月)	この年, パソコン第1号機導入
85年4月	大原研究所の所長に就任(～94年) 「足尾暴動の主體的条件」(～12月)	向坂逸郎文庫受贈 『日本労働年鑑』5部構成に変更 研究所, 多摩校地に移転
86年3月		財団法人を解散し, 付置研究所となる
4月		『研究資料月報』, 『大原社会問題研究所雑誌』と改題
5月		労働資料協, 正式発足(準備会は83年)
10月		『社会・労働運動大年表』刊行開始
87年4月		佐藤博樹氏経営学部へ, 後任五十嵐仁氏
88年5月	『足尾暴動の史的分析』刊行	
6月		「パソコンによる労働問題文献データベース研究」に対し私学振興財団より学術振興資金
89年2月	社会史国際研究所の招待で「労働運動の生成要因の国際比較」研究プロジェクトに参加	
5月	第1回 Duke in Hosei Program のコーディネーター(90年7月)	
8月	鉱山史研究国際会議(西ドイツ・ボーフム)で報告。オーストリア・リンツ労働史国際会議, 国際労働史研究協会総会(オランダ)に出席	創立70周年記念シンポジウム「外国人労働者と労働組合」開催(11月)
90年5月	イギリス・シェフィールド大学日本研究所創立25周年記念国際会議で報告 社会史国際研究所の招待で, オランダ・アルクマールの国際会議に出席	
7月	法政大学夏期講座の引率者としてデューク大学へ(～8月25日)	

8月	フィンランドでのIALHI総会に出席（～9月）	
91年12月	韓国・高麗大学主催の国際会議に招かれ、報告	
92年5月	社会政策学会幹事（～現在）	
93年7月	オーストラリア・ウロンゴング大学主催の国際シンポジウムで報告	
94年3月	大原社会問題研究所 所長退任	マルチメディア・データベースに科学研究費
5月	社会政策学会代表幹事に就任（～96年5月）	
95年8月	韓国・仁荷大学校でのシンポジウムで報告	10月 社会政策学会会則、45年ぶりの全面改訂、幹事の実選禁止など 大原社会問題研究所ホームページ開設
96年12月		
97年1月	研究所のホームページのリンク集を担当	
2月	社会政策学会ホームページの開設を担当	研究所ホームページでデータベース公開
7月	『明治日本労働通信』（岩波文庫）刊行	
9月	個人ホームページ＝二村一夫著作集を開設	
11月	The Ashio Riot of 1907 刊行	WWW上でのマルチメディア・データベースに
98年4月	研究所ホームページを担当	科学研究費特別助成

二村 一夫 著作目録

1957年4月	『日本労働組合評議会資料』その1	法政大学大原社会問題研究所
1958年3月	『日本労働組合評議会資料』その2	法政大学大原社会問題研究所
1958年11月	明治40年の足尾暴動について	『労働運動史研究』12号
1959年2月	『日本労働組合評議会資料』その3	法政大学大原社会問題研究所
1959年7月	足尾暴動の基礎過程 「出稼型」論に関する一批判	『法学志林』57巻1号
1959年7月	足尾暴動〔日本労働運動史3〕	『学習の友』69号
1959年10月	書評 ハイマン・カプリン編著『明治労働運動の一齣』	『読書新聞』'59.10.5
1960年3月	資料紹介 永岡鶴蔵「坑夫の生涯」	『労働運動史研究』20号
1960年3月	『日本労働組合評議会資料』その4	法政大学大原社会問題研究所
1960年4月	『日本労働組合評議会資料』その5	法政大学大原社会問題研究所（解説執筆）
1960年6月	書評 信夫・渡部・小山編『講座 現代反体制運動史 1』	『読書新聞』'60.6.13
1960年10月	足尾暴動	三一新書『日本労働運動の歴史』
1961年3月	『日本労働組合評議会資料』その6	法政大学大原社会問題研究所（解説執筆）
1963年3月	『日本労働組合評議会資料』その7	法政大学大原社会問題研究所（高橋彦博・大羽奎介と共同編集）
1963年12月	『日本労働組合評議会資料』その8	法政大学大原社会問題研究所（高橋彦博と共同）
1964年9月	金属機械労働組合運動史（大羽奎介・高橋彦博・石島忠との共同執筆） （分担；鉄工組合の成立と推移、昭和期への一展望）	『金属労働資料』34号
1965年3月	『日本労働組合評議会資料』その9	法政大学大原社会問題研究所（高橋彦博と共同）
1965年10月	日本労働組合評議会史--関係文献目録および解説	みすず『現代史資料月報』
1966年3月	『日本労働組合評議会資料』その10	法政大学大原社会問題研究所（高橋彦博と共同編集）
1966年9月	大原社会問題研究所所蔵の戦前資料について	『資料室報』123号
1966年12月	『日本労働年鑑』第37集 「総評と同盟の大会」「春季闘争・秋期・年末闘争」「政治的大衆行動」「経営者団体」	
1967年3月	『日本労働組合評議会資料』その11	法政大学大原社会問題研究所（解説執筆）
1967年4月	戦前資料について	『資料室報』129号
1967年6月	鉄鋼下請企業における労働力の需給と移動の実態（舟橋尚道と連名、但し執筆は二村）	『資料室報』131号
1967年12月	『日本労働年鑑』第38集 「政治的大衆行動」「経営者団体の労働政策」「総評・同盟・新産別の大会」	

- 1968年3月 亀戸事件小論 『資料室報』138号
- 1968年4月 書評 星島一夫『地方労働運動史研究序説』 『統一戦線の歴史』(労働運動史研究48号)
- 1968年7月 亀戸事件小論 『自由法曹団団報』49号
- 1968年11月 『近代日本総年表』(分担執筆 戦前の労働中心) 岩波書店
- 1968年12月 『日本労働年鑑』第39集「総評・同盟・新産別の大会」,「政治的大衆行動」,「日本共産党」,「経営者団体の労働政策」
- 1969年2月 新人会機関誌の執筆者名調査 『資料室報』148号
- 1969年3月 『日本社会運動史料』のこゝろ 『図書新聞』'69.3.22
- 1969年5月 社会運動の半世紀(分担執筆 戦前期) 『社会運動の半世紀展 カタログ』
- 1969年6月 戦前における労働運動の本格的発展と敗北 『日本労働運動の歴史と課題』(労働運動史研究50号)
- 1969年12月 『日本労働年鑑』第40集 「政党」
- 1970年2月 全国坑夫組合の組織と活動(1) 『資料室報』159号
- 1970年3月 書評 隅谷三喜男解説『職工及び鉱夫調査』 『朝日新聞』'70.3.3
- 1970年3月 書評 斎藤勇『名古屋地方労働運動史』(明治・大正篇) 『日本読書新聞』'70.3.9
- 1970年7月 建設者同盟関係年表 『資料室報』163号
- 1970年10月 紹介 『堺利彦全集』 『日本読書新聞』'70.10.5
- 1970年12月 『日本労働年鑑』第41集 「政党」
- 1971年1月 全国坑夫組合の組織と活動(2) 『資料室報』168号
- 1971年2月 文献研究・日本労働運動史 『資料室報』169号
- 1971年6月 書評 岩村登志夫『日本人民戦線史序説』 『東京新聞』'71.6.7夕
- 1971年6月 労働運動史(戦前期) 『文献研究・日本の労働問題 増補版』
- 1971年6月 60年代における日本労働問題研究の到達点 兵藤剣 『日本における労資関係の展開』について
『季刊 労働法』80号
- 1971年11月 雑誌『マルクス主義』の執筆者名調査 『資料室報』177号
- 1972年3月 『日本労働年鑑』第42集 「政党」
- 1972年3月 大原社研の事業 『図書新聞』1154号
- 1972年8月 全国坑夫組合の組織と活動(3) 『資料室報』185号
- 1972年12月 『日本労働年鑑』第43集 「政党」
- 1973年10月 亀戸事件小論 『歴史評論』第281号 『資料室報』138号の再録
- 1973年12月 『日本労働年鑑』第44集 「政党」
- 1974年1月 座談会 戦後の大原社会問題研究所と労働年鑑 『資料室報』200号
- 1974年5月 雑誌『マルクス主義』の5年間(1) 『資料室報』203号
- 1974年11月 「田万蔵書」と「発禁」
- 1974年12月 『日本労働年鑑』第45集の「政党」
- 1975年1月 労働運動史(塩田庄兵衛・中林賢二郎と共同執筆) 日本経済学会連合『経済学の動向』中巻
- 1975年7月 雑誌『マルクス主義』の5年間(2) 『資料室報』215号
- 1975年9月 労働者階級の状態と労働運動 『岩波講座 日本歴史18』
- 1975年10月 鉱山業における労資関係の歴史的概観 『金属鉱山研究会会報』9号
- 1975年11月 飯場制度・納屋制度 労資関係の変化と労働争議の激化(大石・宮本編『日本資本主義発達史の基礎知識』有斐閣)
- 1975年11月 日本労働運動史参考文献案内(是枝洋と共同執筆) 『資料室報』219号
- 1975年12月 『出版警察報』所載の『無産者新聞』に関する調査について 『資料室報』220号
- 1975年12月 資料は資料を呼ぶ 『法政』257号
- 1975年12月 『日本労働年鑑』第46集 「政党」
- 1976年4月 座談会 日本の大学・イギリスの大学 『法政』260号
- 1976年4月 研究所紹介 大原社会問題研究所 社会労働問題研究センター 『法政』261号
- 1976年6月 日本労働運動史を学ぶ人のために 『労働運動史研究』59号《日本の統一戦線運動》(是枝洋と共同執筆)
- 1976年12月 『日本労働年鑑』第47集 「政党」

- 1978年 5月 世界の街角 世界一長い駅名 『法政』
- 1978年 8月 『無産者新聞』小史（上） 『資料室報』247号
- 1978年10月 『無産者新聞』小史（下） 『資料室報』249号
- 1978年10月 書評 隅谷三喜男編 『日本労使関係史論』 『経済学論集』44巻3号
- 1978年12月 『日本労働年鑑』第49集 「政党」のうち 各党の国会活動 自治体選挙の結果 以外
- 1979年 3月 『日本社会運動人名事典』（共同編集） 青木書店 執筆は、麻生久，加藤勤十，佐野学，神野信一，櫛田民蔵，黒田寿男，高津正道，永岡鶴蔵，宮崎龍介，三輪寿壮 高野房太郎，高野岩三郎ほか約40人
- 1979年 4月 『黎明期日本労働運動の再検討』『労働運動史研究』62号，編集，まえがき）
「職工義友会と加州日本人靴工同盟会」
- 1979年 5月 メーカーは世につれ 『朝日新聞』79.5.1夕
- 1979年 9月 解題 『無産者新聞』 『復刻シリーズ・日本社会運動史料』
- 1979年10月 片山潜の未発表書簡について 「パーマー・レイド」前後とモスクワ便り 『資料室報』259号
- 1979年11月 座談会 法政大学大原社会問題研究所の 秘蔵貴重書・書簡特別展示 の意味 『週刊読書人』1306号（司会，編集）
- 1979年11月 『日本労働年鑑』第50集 「政党」
- 1980年 4月 60 Years of Ohara Institute for Social Research 『資料室報』264号（Andrew Gordon 訳）
- 1980年 4月 Research into Japanese Labour History in the last thirty years
（1980年第1回労働運動および労働者階級に関する国際フォーラム提出 paper）
- 1980年 5月 書評 立花雄一『評伝 横山源之助』 『法政』302号
- 1980年11月 『日本労働年鑑』第51集 「政党」
- 1980年12月 『法政大学百年史』（分担執筆；法政大学大原社会問題研究所）
- 1981年 2月 足尾銅山における労資関係の史的分析 「足尾暴動の基礎過程」再論(1) 『研究資料月報』273号
- 1981年 3月 「足尾暴動の基礎過程」再論 『金属鉱山研究会会報』27号
- 1981年11月 足尾暴動の基礎過程 「出稼型」論に関する一批判 歴史科学体系 『労働運動史』校倉書房
- 1981年11月 足尾銅山における労資関係の史的分析 「足尾暴動の基礎過程」再論(2) 『研究資料月報』281号
- 1981年11月 『日本労働年鑑』第52集 「政党」
- 1982年 3月 労使関係・労働運動 経済学会連合編 『経済学の動向』第2集
- 1982年 4月 『大阪労働学校史』（編集） 法政大学出版局
- 1982年 5月 足尾銅山における労資関係の史的分析 「足尾暴動の基礎過程」再論(3) 『研究資料月報』286号
- 1982年 7月 労働者教育運動の足跡 大阪労働学校の人々 『法政通信』123号
- 1982年 8月 1880年代の鉱山労働者数 『日本鉱業史研究』12号
- 1982年 9月 原蓄期における鉱山労働者数（上） 『研究資料月報』289号
- 1982年10月 原蓄期における鉱山労働者数（下） 『研究資料月報』290号
- 1982年11月 『日本労働年鑑』第53集 「政党」
- 1982年 Society for the Study of Social Policy
Information Bulletin of The Union of National Economic Associations in Japan No.2
- 1983年 3月 久留間鮫造先生年譜 『研究資料月報』294号
- 1983年 4月 労働運動史研究会の25年 『労働運動史研究会会報』5号
- 1983年 6月 足尾暴動 市民塾 足尾 講演記録集 『なぜ、今、足尾か』
- 1983年 6月 足尾銅山における労資関係の史的分析 「足尾暴動の基礎過程」再論(4) 『研究資料月報』297号
- 1983年 7月 『我等』『批判』の復刻刊行にあたって リーフレット
- 1983年11月 『日本労働年鑑』第54集 「政党」
- 1983年12月 足尾銅山における労資関係の史的分析 「足尾暴動の基礎過程」再論(5) 『研究資料月報』302号
- 1983年 Society for the Study of Social Policy
Information Bulletin of The Union of National Economic Associations in Japan No.3
- 1984年 1月 足尾銅山における労資関係の史的分析 「足尾暴動の基礎過程」再論(6) 『研究資料月報』303号
- 1984年 2月 企業別組合の歴史的背景（レジュメ） 『労働運動史研究会会報』7号
- 1984年 3月 企業別組合の歴史的背景 『研究資料月報』305号

- 1984年 7月 大島清・森戸辰男両先生の死を悼む 『研究資料月報』308号
- 1984年 8月 足尾銅山における労資関係の史的分析 「足尾暴動の基礎過程」再論(7) 『研究資料月報』309号
- 1984年 8月 労働組合史 『選書調査会報告書 昭和58年度』(東京都立中央図書館)
- 1984年 9月 足尾銅山における労資関係の史的分析 「足尾暴動の基礎過程」再論(8) 『研究資料月報』310号
- 1984年 9月 森戸辰男先生を偲ぶ 『労働』1984 9臨時号
- 1984年12月 『日本労働年鑑』第55集 「公明党」
- 1984年 Society for the Study of Social Policy
Information Bulletin of The Union of National Economic Associations in Japan No.4
- 1985年 5月 我がライバル 『戦旗』復刻版推薦文
- 1985年 5月 未完の高野房太郎伝 『人生は旅 人は旅人 大島清追憶文集』
- 1985年 5月 足尾暴動の主體的条件(1) 『研究資料月報』318号
- 1985年 6月 足尾暴動の主體的条件(2) 『研究資料月報』319号
- 1985年 9月 足尾暴動の主體的条件(3) 『研究資料月報』322号
- 1985年12月 足尾暴動の主體的条件(4・完) 『研究資料月報』325号
- 1985年12月 『日本労働年鑑』第56集 「はしがき」, 「序章」
- 1986年 2月 「向坂文庫」の寄贈を受けて 『労働組合』227号
- 1986年 2月 向坂先生の落書き 『社会主義』250号
- 1986年 3月 中林賢二郎さんのこと 『労働法律旬報』1139号
- 1986年 4月 石母田正先生略年譜 追悼の集い パンフレット
- 1986年 4月 ひとこと釈明させて下さい 『河上肇記念会会報』23号
- 1986年 4月 石母田正先生 『法政』361号
- 1986年 4月 ごあいさつ 『大原社会問題研究所雑誌』329号
- 1986年 5月 Mein Vaterland ist International; Internationale Illustrierte Gesichte des 1.Mai
1886 bis Heute Asso Verlag の Japan の部を執筆
- 1986年 5月 労働組合組織率の再検討 『大原社会問題研究所雑誌』330号
- 1986年10月 『社会・労働運動大年表』(共同編集) 労働旬報社
- 1986年12月 対談 労働の社会史 西川正雄氏と(発言・編集) 『読書のいずみ』29号
- 1986年12月 『社会・労働運動大年表』(共同編集および「刊行にあたって」を執筆)
(共同編集) 労働旬報社
- 1987年 1月 『社会・労働運動大年表』別巻(共同編集) 労働旬報社
- 1987年 2月 中林賢二郎さんのこと 追悼文集刊行委員会編 『追憶 中林賢二郎』 『労働法律旬報』の再録
- 1987年 5月 日本労使関係の歴史的特質 社会政策学会年報第31集 『日本の労使関係の特質』御茶の水書房
- 1987年 6月 『日本労働年鑑』第57集 「はしがき」, 「序章」, 「政党」(「国会および選挙」を除く)
- 1987年 貴重な記録の発掘(石川県社会運動史刊行会編 『金沢憲兵隊文書』推薦の辞)
- 1988年 1月 1987年読書アンケート 『みすず』324号 みすず書房
- 1988年 5月 『足尾暴動の史的分析 鉱山労働者の社会史』 東京大学出版会
- 1988年 6月 労働争議研究の成果と課題 『労働運動史研究会会報』16号
- 1988年 6月 『日本労働年鑑』第58集 「はしがき」, 序章
- 1988年 7月 しぶしぶの弁 『六友会会報』
- 1988年 8月 Die Geschichte des 1. Mai in Japan Peter Pörtner 訳
『KAGAMI japanischer zeitschriften spiegel』1985 2/3
- 1988年10月 『石母田正著作集』(編集・校訂)第14巻, 岩波書店
- 1988年10月 《70年こぼれ話 1》大原孫三郎が出した金 『大原社会問題研究所雑誌』359号
- 1988年11月 《70年こぼれ話 2》大原孫三郎と河上肇(1) 『大原社会問題研究所雑誌』360号
- 1988年11月 事務局長落第記 『労働運動史研究会会報』17号 創立三十周年特集号
- 1988年12月 《70年こぼれ話 3》大原孫三郎と河上肇(2) 『大原社会問題研究所雑誌』361号
- 1989年 1月 《70年こぼれ話 4》研究員第 1号 『大原社会問題研究所雑誌』362号
- 1989年 1月 賢兄愚弟 大原社研の昔と今 『法政大学報』8号
- 1989年 1月 賢兄愚弟 大原社研の昔と今 『法政』391号

- 1989年 1月 1988年読書アンケート 『みすず』335号 みすず書房
- 1989年 3月 大原社会問題研究所の70年 座談会《政経ビル時代の思い出》（司会および編集）
所蔵図書資料の概要、所蔵図書資料の概要中、米騒動関係資料 『大原社会問題研究所雑誌』363・364号
- 1989年 4月 《70年こぼれ話 5》後藤貞治のこと 『大原社会問題研究所雑誌』366号
- 1989年 4月 解題『飯場制度関係資料』 左合藤三郎編集発行
- 1989年 5月 書評 吉田千代『評伝鈴木文治』 社会政策学会年報第33集 『産業空洞化』と雇用問題』御茶の水書房
- 1989年 5月 《70年こぼれ話 6》柏木の土蔵 『大原社会問題研究所雑誌』367号
- 1989年 6月 《70年こぼれ話 7》荒畑寒村の見た大原社研開所式 『大原社会問題研究所雑誌』368号
- 1989年 6月 『日本労働年鑑』第59集「はしがき」、「序章」、「社会党」
- 1989年 9月 Historische Charakteristika der industriellen Beziehungen in Japan Holger Törkel訳
『KAGAMI japanischer zeitschriften spiegel』1986 2/3
- 1989年10月 《70年こぼれ話 8》月島調査と大原社研 『大原社会問題研究所雑誌』372号
- 1990年 1月 1989年読書アンケート 『みすず』32巻1号
- 1990年 2月 文書館・史料館めぐり 法政大学大原社会問題研究所 『日本歴史』501号
- 1990年 3月 「向坂文庫」について 雑誌『法政』17巻2号
- 1990年 3月 《70年こぼれ話 9》宇野弘蔵と浅草調査 『大原社会問題研究所雑誌』376号
- 1990年 4月 『石母田正著作集』第15巻（編集・校訂）岩波書店
- 1990年 5月 Japan Marcel van der Linden & Jürgen Rojahn (ed.), The Formation of Labour Movements
1870-1914; An International Perspective, Vol.II, Leiden Brill
- 1990年 6月 《70年こぼれ話 10》権田保之助のこと 『大原社会問題研究所雑誌』379, 380号
- 1990年 6月 翻訳 S.キャッスルスズ 西ヨーロッパにおける外国人労働者と労働組合 『大原社会問題研究所雑誌』379, 380号
- 1990年 7月 『日本労働年鑑』第60集「はしがき」、「序章」、「日本社会党」
- 1990年 8月 《70年こぼれ話 11》権田と櫛田 - 明治の社会主義青年 『大原社会問題研究所雑誌』381号
- 1990年 8月 法政大学大原社研所蔵の裁判記録について 『自由と正義』Vol.41 No.8
- 1991年 6月 『日本労働年鑑』第61集 「はしがき」、「序章」、「国会と各党の動向」
- 1991年 7月 法政大学大原社会問題研究所の現況 二村一夫所長に聞く 『歴史評論』495号
- 1991年 9月 書評 Stephen Marsland, The Birth of the Japanese Labor Movement:
Takano Fusataro and the Rodo Kumiai Kiseikai 『大原社会問題研究所雑誌』394号
- 1991年 9月 Bookreview Stephen Marsland The Birth of the Japanese Labor Movement:
Takano Fusataro and the Rodo Kumiai Kiseikai, International Review of Social History, Vol.XXXVI-
1991-3
- 1991年10月 座談会「大原社会問題研究所と社会運動資料の復刻」『法政』18巻8号
- 1991年12月 1991年度歴史学研究大会報告批判 近代史部会 『歴史学研究』第627号
- 1991年12月 “Efficiency and Labor Relations in Japanese Manufacturing Industries”
Paper presented at the International symposium on Industrial Democracy, State, Labor & Capital
- 1992年 1月 1990年読書アンケート 『みすず』370号
- 1992年 1月 翻訳 A.ゴードン 書評 E. Patricia Tsurumi Factory Girls: Women in the Thread Mills of Meiji
Japan 『大原社会問題研究所雑誌』398号
- 1992年 2月 書評 村串仁三郎『日本の伝統的労資関係』 『歴史学研究』629号
- 1992年 3月 労働関係研究所の歴史・現状・課題 『大原社会問題研究所雑誌』400・401号
- 1992年 6月 翻訳 A.ゴードン 書評 Mary Saso, Women in the Japanese Workplace 『大原社会問題研究
所雑誌』403号
- 1992年 6月 『日本労働年鑑』第62集「はしがき」、「序章」
- 1992年 The trade union response to migrant workers
in Glemm Hook & Michael Weiner ed. The Internationalization of Japan by Routledge, London
- 1992年 7月 The Ashio Riot of 1907; The Traditional Miners' Brotherhood, the Trade Union, the Hanba System
and the Company in Klaus Tenfelde ed. Sozialgeschichte des Bergbaus im 19. und 20. Jahrhundert
C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München

- 1992年9月 翻訳 A. Gordon 書評 Michael Lewis, *Rioters and Citizens: Mass Protest in Imperial Japan*
『大原社会問題研究所雑誌』406号
- 1992年9月 アメリカの一流大学における学生の質の変化について 大原社会問題研究所公開セミナーの記
『法政』19巻7号
- 1993年4月 高野房太郎の生涯 労働運動離脱の謎を中心に 『労働運動史研究会会報』25号
- 1993年6月 『日本労働年鑑』第63集「はしがき」,「序章」
- 1994年1月 戦後社会の起点における労働組合運動 渡辺治他編 『シ-ス 日本近現代史4 戦後改革と現代社会の形成』岩波書店
- 1994年2月 書評 尾高煌之助 『職人の世界・工場の世界』 『大原社会問題研究所雑誌』423号
- 1994年5月 大原社会問題研究所を創った人びと 『大原社会問題研究所雑誌』426号
- 1994年6月 『日本労働年鑑』第64集「はしがき」,「序章」
- 1994年12月 "Post-Second World War labour relations in Japan"
Jim Hagan & Andrew Wells (ed.) *Industrial Relations in Australia and Japan* Allen & Unwin
- 1994年12月 書評 栗田健 『日本の労働社会』 『大原社会問題研究所雑誌』433号
- 1995年5月 《日本社会運動史料》と松尾多賀さん 松尾洋編 『松尾多賀をおくる』
- 1995年6月 『新版 社会・労働運動大年表』(共同編集)
- 1995年6月 年表 大國・日本 『ウイークリー出版情報』No.655
- 1995年6月 『日本労働年鑑』第65集「序章」
- 1995年11月 大原慧さんのこと 大原慧さんを偲ぶ会編 『追憶の大原慧』
- 1996年4月 工具・職員の身分差別撤廃 『日本労働研究雑誌』443号
- 1996年 多摩移転前後の大原社会問題研究所 『多摩移転10年記念誌』
- 1996年6月 『日本労働年鑑』第66集「序章」
- 1996年12月 岩波文庫創刊70周年アンケート「私の三冊」 『図書』571号
- 1996年12月 書評 日本労働社会学会 『企業社会の中の女性労働者』 『大原社会問題研究所雑誌』457号
- 1997年3月 日韓労使関係の比較史的検討 『大原社会問題研究所雑誌』460号
- 1997年3月 高野房太郎と明治労働運動資料 『法政』486号
- 1997年7月 編訳 高野房太郎 『明治日本労働通信 労働組合の誕生』(大島清と共同, 解説「高野房太郎小伝」) 岩波文庫
- 1997年11月 *The Ashio Riot of 1907: A Social History of Mining in Japan* (Translated by Boardman & Gordon)
Duke U. Press
- 1997年12月 岩波新書創刊60周年アンケート「私の薦めるこの1冊」 『図書』584号
- 1998年3月 日韓労使関係の比較史的検討 (法政大学大原社会問題研究所編 『現代の韓国労使関係』御茶の水書房 所収)
- 1998年6月 『日本労働年鑑』第68集 巻頭グラビア「労働組合100年」
- 1998年9月 紹介 Eric Lee, *The Labour Movement and the Internet; The New Internationalism* 『大原社会問題研究所雑誌』478号
- 1998年12月 インターネットと労働運動 世界と日本の労働組合サイト 『大原社会問題研究所雑誌』481号